

川柳塔

昭和四十一年一月十九日
昭和五十一年十二月二十五日
印刷
第三種郵便物認可
発行(毎月一日発行)
通卷 五九五号



日川協加盟

No. 595

51年度秀句抄

十二月号

姉妹品大和錦印



警察庁・警視庁
全国府県警察
大阪府警察本部
講道館・御指定

柔道衣 剣道具

早川繊維工業株式会社
大阪支店

大阪市天王寺区伶人町29番地の1
電話(779)1690~2番

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ!

豚 焼 焼餃子
又 焼 焼 焼
焼 焼 焼

豚まんの王様、やき豚入り



大 阪・なんば



TEL(641)0551~2



<出張店> なんば高島屋/虹のまち鹿鳴/心齋橋そごう/梅田阪神/天満橋松坂屋
京阪デパート/堂島地下センター/中之島サン・スター/なんば新川店/奈良近鉄百貨店

三人揃い踏み

なんとしても敬老という字のそらぞらし
居眠りの小春日へデモの足拍手
文化の日機動隊が腑に落ちず
病み呆けとぼけ頭でことば選る
ラジオでは8年間おなじみ糸賀きぬさん
久し振りですねと妙な初対面

それも言うなら三役揃い踏みだろう。いや
いやあれは相撲での話。ここで言う三人揃い
踏みとは？。実は日川協常任理事会が10月15
日、当番の神戸で持たれ、例の如く全員出
席、来春の総会等協議した事項が多く発言は
看板時間まで。追いたてられて散会。私は皆
と別れ国鉄元町駅から大阪に向った。車中ふ
と眺めると見馴れぬ靴をはいている。気にな
り出すと妙なもので、浜寺の自宅に着くまで
は月面でも歩いているこち。翌朝、雲雀氏か

ら電話。「君の靴をはいて帰った事がわが家
に着いてから、君のネームが貼ってあるので
判った。僕のものにも貼ってあるから調べてく
れ」。しかし皮の色も型も違うしネームも貼
ってない。そこで私の靴は雲雀氏の許にある
として、雲雀氏の靴はどこへ行った。電話で
問い合せるが返事は「違いますなあ」ばかり。
結局判った事は砂人氏の靴を私が、雲雀
氏の靴を砂人氏が、私の靴を雲雀氏が、これ
で三人揃い踏みは一件落着。

中島生々庵

川柳塔十二月号

座右の句

人間のおしまい著で拾われる

(甲吉)

私の句

勿体なや今朝の惰性の目を覚まし

岩井本蔭棒

川柳塔 十二月号 目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

三人揃い踏み

中島生々庵 (1)

師走

本田恵二朗 (2)

誹風柳多留廿五篇研究

(十三)

清博美・八木敬一・紀内恒久・青木迷朗・西原亮
鈴木黄・室山三柳・入江勇・岡田甫

川柳塔 (同人作品)

若本多久志選 (4)

水煙抄

川村好郎選 (34)

麻生路郎物語

(24)

東野大八 (21)

秀句鑑賞 (同人吟)

(水煙抄)

橋高薰風 (46)

祖谷溪行

山本素郎 (47)

百人一首と川柳 (30)

西尾棗 (48)

愛染帖

富士野鞍馬 (42)

正本水客選 (44)

師走

本田恵二朗

明暗を吹き分けている師走風

師走とか年の瀬とかの声を聞くと、いつもの月と違った心理状態になるから不思議である。生きる道の明暗を吹き分けるように師走の風は冷たく、うらさびしい。

手袋を片っぽ落した十二月

別に忙しくもない身分の者までが、さも忙しげにしている。手袋を片っぽ落して戻ったりするのも師走ムードの一つであろう。

年の瀬へメモぎしぎしと音をたて

心忙しいと物忘れがやたらによくなる。老境ともなるとその傾向が濃厚になってメモ帳が手ばなせない。年の瀬のわびしさの一つである。一老婆と物忘れごっこして平和一などと負け惜しみも言いたくなるからあわれた。

年末が来るとこの世をはかながり

銭に羽がはえるのも年末である。ローンだ車の月賦だと、いつもの月の三倍も四倍も銭が出てゆく。ポーナスがあれよあれよと減量の憂目を見る。この世をはかながるのも無理

大阪文化祭川柳大会	有信新之助	(51)
あゝ静観堂大人	菊沢小松園	(55)
葛城伊三郎氏逝く	福浦 勝晴	(60)
女シリーズ	菊沢小松園	(43)
初歩教室	本田恵二朗	(54)
大萬川柳「手応え」	川村好郎選	(56)
柳界展望	(庸佑・整理)	(58)
本社十一月句会	高杉鬼遊選	(61)
各地柳壇(佳句地10選)	大路美幸選	(64)
「借 金」	天正千梢選	(52)
一路集「忙わしい」	谷垣史好選	(52)
「キリスト」	(一三夫・葉子)	(53)
編集後記		(69)



からぬことであるが、私の周囲を見渡すと、本気ではかながっているのは見当らない。中にはさも楽しそうにはかながっている奴がいるからにくたらしき限りである。

忘年会ことしの脱線しおさめる

忘年会という一種のしきたりが古来続いている日本である。一種の憂き晴しみたいな匂いもするが、それならそれでよい。大いに酔っぱらって、怪気煙で師走の憂きを追い払うのもよからう。無邪気な脱線振りは愛すべきものがあり、にくめないものがある。

十二月三十一日産気つき

この一句は、私の親族の内ですら実際にあったことであり、この年齢になるまで、たった一度だけの経験でもあるので、その微笑ましい風景が、今も目に浮んでくる。出ものはれの処きらわずなどと毒舌を吐くのもいて、それがまた芽出度さに輪をかけたりにして、芽出度く忙しい大晦日風景を現出したことである。

紅白の歌でことしを締めくくりに

坐椅子にもたれて、炬燵の中に足を投げ出して、目を細めて、歌声に聞き惚れている自画像である。それにしても、もうじきに七十本の年輪を重ねる除夜の鐘を聞こうとしている私の姿を、も一人の私が眺めて、淡い感傷にひたっている。



若本多久志選

松原市 谷 恒 史 好

悪人も善人も死に青い空

曳き船がゆっくり帰る午後の愛

駄菓子屋へひとり来る子は哀しい子

風よ吹くなだんだん丸い母の背に

彼岸花戦さの記憶遠ざかる

生年月日だけは素直に信じよう

桜井市 岩 本 雀 踊 子

ハンカチの白さへ演技する女

花嫁を見る巫女の目は女

負けてやる勇気を男持っている

首塚に血より赤き彼岸花

カナリヤが逃げた巣箱に冬の音

生きる。と云うその苦しみにゼニの音

竹原市 森 井 菁 居

悲劇背負うて喜劇の端役たらんとす

なんとなく目標があり歩を刻む

春夏秋冬哀しさだけがつきまとう

過去問うてみても一本杉無言

小春日を弾くカンナの朱がふびん

聞き役に廻って通夜の客でいる

神戸市 小 浜 牧 人

第三者その場限りの助言する

柿熟れて軍雞は鬨志が満ちてくる

艶話の一つぐらいは父も持つ

コーヒーの香に秋の夜の孤を愛す

定年の胸へはらはら落ち葉散る

藤井寺市 西 いわを

友禅の絵心となる金魚の背

藤棚の下に将棋の駒一つ

ちぎれ雲むかしの儘の秋の色

紙屑のように疲れた男たち

りんどうの花盛りなる恩師の忌

青森市 工 藤 甲 吉

青立ちの稲を悲しく牛が食い

どの鼻もそれぞれ自己を主張する

心天式に人生グットバイ

びんずるを散歩がてらになでてくる
あくせくとする愚を山にさとされる

大阪市 西 森 花 村

合掌す銃もスプーンもいりません

退職金又エエ話もちこまれ

秋風や天女のくしやみ塔の上

ひねくれた凡夫やつたと巨匠の子
ペンネーム多い仏に阿弥陀さま

富田林市 岩 田 美 代

灯の親し秋の愚痴は言わずおく

ついに来ぬ人へ河内の虫時雨

弱さ見えている男のひとり言

虫の声切れ目があつた別れぎわ

見通しの早い女で彩がない

倉敷市 水 粉 千 翁

回復の気合い重湯を吹いている

赦し合う男が山の高さ知る

一人行く旅路に月はまんまるい

踊ってはならない笛を聞いておき

明日あるを信じて箸の重さ知る

岡山県 嘉 数 千代香

立喰いのうどんは旅の顔で食べ

殴られるような言葉にある意味

遠い日の筈がかえる蓼参みち

野良犬になるなと野良犬子を育て
編棒の交差に母の愛を編み

大阪市 不二田 一三夫

公害っ子 戦争知らぬだけのこと

目を閉じてしばし汚れる世を逃避

空中ブランコ恋人同士の信頼感

善人すぎても悪人すぎても 孤独

もの書きのがしんたれ 清貧などと云う

八尾市 高 橋 夕 花

時計台濡れて女も時雨れてる

片っぱの目を閉じておく善もある

静いあとの鏡が恐くなる

さよならと枯葉にすこしふり向きぬ

月の道やはりわが家の灯に歩く

八尾市 宮 西 弥 生

出嫌いの母へ流行着せたげる

幸福なときの女で矢を憎む

移り気の蝶は野生の花育ち

掌にぬく味が通う母と居る

花のある部屋で女濁かない

大阪市 吉 田 圭井堂

河岸替えてマダム外資を導入し

代筆の年賀へ安否問う手紙

こね廻す世にさからわず餅こね器

甲兜を持って余して団地入り

大和三山茶粥の香り立ちこめる

竹原市 三宅 不朽

どうにでもなる十円をゆずり合い

人形に埋り父の名を知らず

杉研がぬ日の掌も冷たき杉研ぐ女

霧の濃淡情あるごとし旅ひとり

横縞に秋が秋織る石の階

宝塚市 傍 島 静 馬

まっ先に神経痛が秋を知る

へんくつが素直になつて呆けはじめ

櫛の多寡で人物はかられぬ

ご利益と売名ねらう寄進札

クラス会どんぐりばかりで盛りあがる

大阪市 有 信 新之助

白蝶のまつわる喪服の無表情

もの云わぬふくれた腹へ酒が泌む

不況風から逃れて釣りの風にいる

正直に上げ底ですと高い靴

深刻なふたりへ熱いうどん置く

八尾市 大 路 美 幸

叩かれて少年疑い深くなる

ああ通勤 人は戦さより知らぬ

満ち足りぬ日の多過ぎたカレンダー

善人の道づれ妻という達磨

茶柱に騙されつづけた孤老の死

島根県 堀 江 正 朗

想い出は臉のなかに秋は澄み

散髪をそつと手で見るおしゃれかな

日本の変つた話を聞く恐さ

うたた寝へ布団ふんわりまでは知り

指先きに欲が残っている動き

島根県 堀 江 芳 子

指示カロリー生きねばならず秋に耐え

お茶漬といっしょに口惜しさ呑みこんで

時おいて話せばまるくすむ安堵

嬉しさをハンドバッグに詰めて発ち

夫 なにを想うか正座崩さない

鳥取市 河 村 日 満

でしゃばらぬ気が先にたつ老いさびし

みやげばなしに夕陽の中の嫁が鳥

バラ色の夢還歴をすぎてなお

良心がまだありポツと顔に出る

竹原にて(二句)

初対面から善人の酌きこぼし

愛情のふとんわが家のように寝る

竹原市 山 内 静 水

野心さらさら敵は幾万ありとても

痛いところ突く叔父上に座らされ

傷をなめあって仏にめぐり逢え

ついてくる子犬をやつとはぐらかせ

幸福はいま二人で聴く法話

高根市

若柳潮花

御堂筋銀杏で飲む酒場

神戸市 仲

どんたく

燃えるだけ燃えて淋みし曼珠沙華

大安吉日親に悲しい日を祝い

噛み切つて口に含んで見たい指

舞い衣の引抜きに見る藤娘

梯子して酒場泣かせの五色酒

大阪市

中川滋雀

鍛かつぐ肩やや落ちて夕焼ける

岡山県 出原敬一

信濃路にそばの湯気から秋がくる

戒壇の闇に信じるものを追う

読みなれたお経に雑念のぞかれる

黄は朱にも青にも添うて和に生きる

消しゴムのちびる命の丸さかな

富田林市

和田維久子

熱燭もよし夕べ出合うてうち解けり

松江市 小林孤呂二

みちのくの紅葉へ想う事多し

物を得て心失なう瞳に出会う

明されぬ想いへ声なき友と居る

陰膳を盛る母の手は圓う見え

永劫の涯なる燃える灯揺れ止まぬ

島根県

藤井明朗

新調の靴 定年を蹴り返す

米子市 八木千代

紅葉のたよりあわてる冬仕度

久しぶり会うてふところのぞかれる

床柱背に金婚は小さく座し

庭つづき隣の主は趣味のひとつ

豊かなる秋も値上げの風きびし

面影と居る夜無性に酒が欲し

大阪市 本多柳志

生かされた今日を働く革靴

十字架の重さに耐えている微笑

炎ゆることもなく老いらくの恋終る

明日ありと思う心がネジを巻く

ピリオドを打って戻った酒の味

和歌山市

野村 太茂津

愧悟る涅槃の軸に対峙して

愧消した五体へ秋の酒染みる

残愧に堪えぬそんな偽り囁けず

やわらかく愧を包んで仏陀の瞳

煩惱無尽業しい旅の道草で

倉敷市

藤井 春日

ホステスの勘は職業ピタリ当て

ワンドフルカメラ舞妓へ向けられる

踏ん張って掛声だけの齡となり

子を思う母の姿は慈母観音

一と刻の雨宿りとされるのも女

松江市

吉岡 通児

在位五十年記憶のひだに潜むもの

風の意に髪なすままに寡婦生きる

北辺の空港の夜話時うつる

世相戯画チクリ政治の恥部を刺す

止り木で聞く情報にオチがあり

東大阪市

本多 清人

シヨッピング妻の笛吹くまま踊る

手のひらにのる愛であり灯にあそぶ

裏と出るその人生に挑戦す

煙突がきつい錠の煙を吐く

視線みな背へ集めてやくざ下車

竹原市

小島 蘭幸

手本通り書いても満点ではなくて

欲が出てきたかと恩師眼を細め

人知れず咲く花ありや秋の澄む

ひたむきな愛閉じ込める日記帳

ほほえめば鏡の中も秋でした

大阪市

天正 千梢

バカの多数決へ故意に目をつむる

役割に目覚め愛に徹しかけ

知識をつめ込んで安らぎに遠くいる

貧しい心でニセ物拜んでいる

自己慢心の坐禅組んでいる

八尾市

香川 酔々

落人の里で時計が時刻む

罪いくつ重ね弥勒の貌に似る

霧晴れて駆込寺がそこにある

裏町のドラマはかない愛がある

五百羅漢の一人に怖い伯父がいる

大阪市

金井 文秋

病んでいる身へ迷信がしのび寄る

健康だから信じない神ほとけ

娘夫婦ロンドン転勤

ハウマッチサンキユーだけで用を足し
ロンドンから電話高価な声を聴く
時差に気が付いて挨拶とまどわせ

寝屋川市 宮尾 あいき

みそ汁の菊菜が香る今日も幸せ

ニユーモードの衿元サロンパスが匂う
隠家の金木犀が人を呼ぶ

しとしとと心へ泌みる秋の雨
呑み込んだ涙で心重くなる

大阪市 小出 智子

米櫃に米を充して笑えない
自我一つ秋をきびしいものにする

この家の匂いの中の夫婦像
焦りとも気付くにながし秋の夜
人の死を身近に菊のかげりあり

大阪市 河野 君子

屋鏡現在の私を写さない

指櫛に愛の憂いが這い上る
唇を噛んで弱気を押し込める

九〇歳の姑を見舞うて

西から陽が昇って来そうな老母を見る
病む老母の過去は茜の雲に乗せ

松江市 中川 晃男

わが家に泣声帰る 初の孫

軽い小さい初孫を抱くそつとそつと

山紫水明にしてふるさとに人住まず

余生ではない 私の本当に生きるとき

切つてやるゾと改札身構える

松江市 恒松 町紅

遅刻せぬ男で永年勤続賞

定年が近い課長で話好き

旅先で聞く伝説が面白い

戦友という友情がまだつづき

サングラス夢中になれぬ性をもち

新宮市 大矢 十郎

嫁がせて帰ってからの朝の冷え

不渡りを忘れた頃に又擱み

七人の五人を知った妻の勘

人生は斯の如しと川流る

此の人にすべてをかけた角かくし

京都市 都倉 求芽

抛り込んだ石がバンザイする飛沫

さば雲のひとつひとつに秋の白

花粉散らしたら雄蕊は知らん顔

晴着着ても指の太さは隠せない

街灯の処だけ雨の独り言

平田市 久家 代仕男

苛ら立ちを蹴とばす石がない舗道

山頂に佇てば女神のパンタロン

夫婦愛 その日ぐらしに壁がない
いまいまし顔にのぞいた糸切歯
反骨の斗士 めっきり老け寡黙

鳥取県 川崎 秋女

一〇キロの孫が食込む 五十肩
古傷に触れまい夫婦に明日がある
一つの誇り胸にたたんで若う生き
寡婦四十 女にかえる化粧する
終点のない遠い道 今日も行く

松原市 玉置 重人

死んだそな禁酒禁煙してたそな
無神論心渴いたことを言う
肚割った友に言葉などいらぬ
ラッシュのホームである日男自嘲する
雲水が仮面のような永平寺

倉敷市 稲田 豊作

遺産分けのムードに驚く白位牌
鞭のある言葉を老師さりげなく
路地裏に住めど夫婦の協和音
泣く人もあつて法話に酔うている
波頭驕れば奈落が待っている

岡山県 直原 七面山

穴道湖をあかねに染めて落つ夕陽
丁重な弔辞へ死人が感謝の辞
囲炉裏火トロトロ老婆の民話なお続く

親切の洪水に寡婦溺れかけ
桐一葉地に還る時詩があり

倉敷市 野田 素身郎

緊張をほぐす煙草の手がふるえ
豊作と聞く松茸膳にまだのらず
障子貼りかえて静かに虫を聞く
赤蜻蛉今じやもんべの娘はいない
秋深し持病ありあう夫婦

大阪市 江城 修史

地に還る枯葉は過去を喋らない
生きる日の限り恩師の温くみ抱く
つきささる不況に誠を見失い
欲望と言う名のルールを子が走る
夜の雨静かに妻と子を語る

鳥根県 錦織 文子

口なしの心憂いを抱いたまま
人間を裁くか深山のきびしさよ
子らの為祈りのふちの渦尽きず
信じ合ぬ人間同士に明日がない
貧しさが善意の灯りももしけり

呉市 榎田 英詩

頬染めて彼にハートの矢をつがえ
湯のたぎり母に嬉しい客があり
腹立てぬ人は神とも愚鈍とも
仏前の妻の姿に五光みる

嬉しい日今朝の鏡を拭いてやり

和歌山市

沢山福水

改築のローンの城へ虹が立ち

旅帰りわが家に勝る城はない

明治村 明治の汽車がまだ稼ぎ

立志伝消えて越後の秋佗し

どんびしやり易が老後の的を射る

東大阪市

竹中肖二

心澄む写経の筆が冴えてくる

うたた寝の小皺がふえた妻の顔

横顔に愁いを含む夢二の絵

真相を語れば他人を傷つける

札束を積む圧力に敗けてくる

大阪市

川口弘生

大柄な女で粧わねばならぬ

引き易い風邪が治らぬ気の弱り

生きて行く重荷夫婦で振り分ける

身二つになって一生の荷を背負う

秋晴れに無人の柿買う浄瑠璃寺

兵庫県

遠山可住

鏡台の底にひそんでいる女

梅干をちよこんと添えた思いやり

耳垢をとって悟りの顔でいる

ふんべつをわきままえて来た無口

秋ここに沈む深さを知っている

私に戻れば迫って来る世間

この辺を倅せとして妻と旅

諦めと期待半分ずつの釣

色目鏡かけて世間を広うする

一杯のコーヒへ愚痴を捨てに寄り

岸和田市

植山武助

ねんころりねんころり安定剤

よだれ掛もらい地蔵の幼な貌

鉄を切るタガネやっぱり鉄である

緩急の呼吸のみこむころ定年

萎みたい造花とことん耐えしのび

鳥根県

小砂白汀

花道のないまま下積み幕が降り

喜怒哀楽のどれにもベレーよく似合い

苦勞させた妻の白髪だ抜いてやり

男一匹 馬鹿になれぬ日酔いつぶれ

蓮の座の句座を茗人活気づけ

鳥取市

両川洋々

退片時魚放したように去に

四苦八苦掛けて満期の銭の価値

五、六人寄ればさくらが買って見せ

歩いてる所作まで似てる血の怖さ

紅一点ほめられほめられ又酌れ

諫早市

原田明春

鳥取市

大塚豊生

馬鹿という主役に徹し名演技

裸一貫男の道があるばかり

ほんのりと噂バラ色の煙り立つ

さよならは言うまい耐えてる瞳がうるみ

良縁へとまどう好きな人があり

愛の鞭痛さの中の曖昧

痛と知る患者で痛を口にせず

まな板も給料前だなどと思う

札束へ良心ぐらりぐらり揺れ

日の丸の旗をゆがんで見る思想

和歌山市 津田与史

他人の方がよかったと気付く白け

のんびりせよと心臓病が云う

理路整然と生きれば貧乏つきまとい

漂々と生きてわが身を疑わず

熟れた柿眺め野仏まばたかず

富田林市 板尾岳人

影法師父は主役の峰づたい

入っても父の樹濡れている金剛

地図のない父の肩巾峰続く

父の髭濃ゆくて山の峰みどり

貫録はないが金剛父の峰

大阪市 大坂形水

新郎のお色直しとは興ざめな

はしゃいでる男を税務署睨んでる

さりげなく一矢報いている後記

一流の雰囲気コニヤック舐めながら

歩く足間近に見える喫茶店

東京都 山根白星

教祖の眼からは一と筋縄で足り

籍入れぬ人に浴衣の糊がきき

昼の風呂アルキメデスの原理など

おおい雲僕の行方もあてどなし

今治市 長野文庫

巧みな詐欺被害者が馬鹿に見え

名も顔も出さぬ殺しの仕掛人

広っぱへ仕事疲れを捨てに出る

若者の自信さつと立ち席ゆずる

八尾市 高杉鬼遊

生涯に矢を放つこともなし案山子

SLが消えるぼっかり穴があく

奉仕する人を遠くで見ている

十二月貧しき家を攻めに来る

豊中市 戸田古方

山を見ぬ猟師のひとりになりはてて

哀れともそれでも髪が染めたくて

描き眉毛またたき毎に動くなり

六十のヌード・モデルとは淋し

尼崎市 黒川紫香

ハワイに遊ぶ

じゆうたんの雲がだんだん紅くなり(機中より)

ダイヤモンドヘッド暁雲突つ走る

ローマ字の墓日本の血も埋まり(パンチボールの丘)

山折れて折れて峡谷変る色(ワイメア峡谷)

倉敷市 田垣方大

鳶一羽悠々下は泥の街

浸水がここまでという壁の色

国保料安いと思う不倅

せめて胸はって歩こう十二月

大阪市 西出一栄

帯ポンと叩いて秋の衣替え

かこち顔照らして急ぐ秋の月

秋冷へ囲碁の背中に羽織らせる

コスモスの花にも蝶の選り好み

西宮市 島居百酒

そこはかと秋 ビールより酒の味

秋さやか詩情に遠き記事を閉ず

木扉が匂うて町の汗を消し

松茸が匂うて秋をたしかにし

松江市 柳楽鶴丸

玉子を割らねばつくれぬ目玉焼

不真面目な農民が長者の中にいる

ママさんバレー来年はスマートになりますよ

清流をのぼる鮎から学びとり

堺市 高橋千万子

思いしきり 行きずりの人遠くとも

この辺でネジも私も油ほし

和服着た疲れを口に帯をとき

角のある言葉へまるく返事する

宝塚市 小島無聖

上品なギャグがホットにする茶の間

御室路に雨にうたれて馨る菊

この花がこの色に咲くおそろしさ

ひとときの夕餉のまどい気がはずむ

高槻市 福田丁路

正眼の構え竹刀に殺気満つ

やがて皆滅びる事を知るや君

ロッキード事件の顔もあるかかし

世をすねた飯の住居に菊薫る

倉吉市 奥谷弘朗

さし向いもらい欠伸を笑い合い

根つからの百姓兄の太い指

花札を二人のルールでする夜長

お金では買えぬ善意の友を持ち

倉敷市 小幡里風

すみません素直に言えた日の軽さ

人形の部屋で少女の丸い夢

下つ端の広場屋台へ月も出る
顔の皺喜怒哀楽の年輪か

今治市 越智 一水

古いことばに耐え抜いた女考える
ありがたいお茶は両手で受けとめる
恋をするすべを知らない秋の蝶
茶のぬくみ両手で心あたためる

愛媛県 渡辺 曉童

松茸の無いのも保守のせいのように
禁煙も禁酒もほめてくれぬ歳
墓場まで持ちこむような嘘がほし
台風一過割前を取りに来る

京都市 松川 杜的

京の本片っ端から京が好き
金魚塚もお盆だ線香上げてやる
うろこ雲はじめて秋のドラマが始まる
仏間の灯祖母の大きなシルエツト

西宮市 若林 草右

そっちからかけてネと電話値上げなり
釣場からヘリが釣客つり上げる

孫運動会

明治までフォークダンスに狩出され
金木屋匂が画いた円い秋

貝塚市 野坂 つき子

計算高い女のコーヒー冷めていた
沈黙を守ると膝が冷えてくる
メロドラマ煎餅かじりながら観る

隙のない女のすきを見てしまふ

東大阪市 落合 思月

ウエディングドレス身重な身をつつむ
四季のない野菜四季を知らぬ花
平和だなあ父ちゃん洗濯機をまわし
スタッフは揃えど先立つものがなし

西宮市 藤村 女

酔いどれがうつろに笑う終電車
老松の枝に抱かれた冬の月
逆境を逆境とせぬ寡婦強し
逢曳の夢へつめたい隙間風

守口市 羽原 静歩

川柳でうつ祝電のあざやかに
水子不動童話を読んで聞かそうか
土かけて永遠のいのちへ掌をあわせ
新聞はうらぶれ末法をくり返し

神戸市 中村 ゆきを

喪中ともいえず取立て狩り出され
女店員の好みで買わす秋のタイ
名月が二つに見えるウイスキー
仮面脱ぐ時の女は米を研ぎ

柏原市 大峠 可動

どの道にも働らくリズムと兵隊と
住みなれてポットに幾たび湯を満たす
信じ合う直線があり濃く長く

風のない時には平凡な顔になる

松江市 岡崎 祥月

飛行雲二本 青空澄んでいる

川柳と信仰二つの宝もの

飼育して飼育をされて共に老い

一と筋の道に心はくじけない

姫路市 梅谿庵 不醉

赤飯と共に仲人に娘を渡し

路聞けば私も路頭に迷よている

占いを気にはかけない気にかける

過去は過去未来は運に委しとく

伊丹市 檉谷 漫柳

留守番の妻アイロンを強くあて

クラーが死骸になって秋を呼び

新聞とテレビと雑誌ジャンケンポン

書留は生れながらに持つスリル

今治市 原田 一風

濁流が引いたらゴミを捨てに来る

てのひらで膝温める秋の雨

空想が過ぎて風船手を離れ

庖丁が研げて割箸削って見る

守口市 村田 瓢太

子等巢立ち肩揉み合うも老夫婦

バスの旅日本も広いなと思ひ

商魂は大文字をも見逃がさず

鷺と烏が同じ田圃で餌を漁る

大阪市 津守 柳信

低い腰だけで商法守り抜き

善だけを信じる人にある素顔

吉凶の色分け欲しい電話ベル

消火器も抱いて女強く見せ

大田市 藤田 軒太楼

捨て石の妙手で主客転倒し

子の無口妻の多辨を承けて居す

よくよくの事だと罪にある同情

胸襟を開けば噂さのお人柄

松山市 谷 のぶお

小銭出す妻の財布の鈴が鳴り

秋風が後姿を遠くする

古時計時間守るに事足りる

夢のないくらし久しく虹を見ず

生駒市 草深 醉升

浴槽でうなつてみれば歌えそう

説明書通りに菜園稔らない

鍋ものも恋し橙色づけり

虫の音を肴に寝酒のむ孤独

奈良市 宮口 笛生

山形の旅

見上ぐれば蔵王は雲にちぎられて

七かまど真赤に蔵王の秋さかり

かえらじの滝は地獄の音で落ち
手拍子にみちのく唄の多かりき

笠岡市 松本忠三

減俸は覚悟囑託として残り

俺に似たのか時計の遅れがち

貴男様は養子ですかと失敬な

会席料理松、竹、梅の梅にする

岡山県 竹内翁童

旅費精算土産の分だけ赤だった

くずれそうな夢を母に支えられ

アドバルーン下界の商魂あざわらい

反省とも希望ともつかぬ日記書く

竹原市 時広一路

のたりゆく雲に判らぬ明日の貌

意地張って降らさぬ旗へ風が無い

引出しの中に仕舞っていた言葉

海暮色 鳥は絵となり詩となり

玉野市 小谷仙山

犬連れた寂しがり屋に萩こぼる

何もかも忘れたいのに彼岸花

道徳の化石のような父であり

真珠貝腹に他人の子を育て

鳥取市 佐々木静泉

消しゴムで消せる範囲で済ませとく

井の中の蛙嘲える吾れでない

幸わせの輪に父母がいてくれる
調節機こわれた夫婦のただ無言

美祿市 安平次弘道

女湯の三時これから稼ぐ顔

疑問符が消えマンネリの日々になれ

そうでしょうでしようと自説押しつける

入社試験思想を右に持ちかえる

泉大津市 村上春巳

さわがしい田んぼ稲刈機脱穀機

名月の出たい秋なり足早に

淡泊な味 方言も添えて出し

遊園地小犬に帰る家がない

大阪市 神谷凡九郎

蹴ってみる小石は自分の姿かも

天気図に似てる心を抱いている

自己を見る服を何処で買おうかな

ロボットになるのにさえもいる考慮

大阪市 黒田真砂

植え替えて苗にも想いあろうもの

若い気の白髪に慌てる秋無情

石仏の顔笑み給う飛鳥道

燃え切って女に淋しい秋日和

鳥取県 林露杖

サルビヤの赤 落日に極まれり

白萩に偲ぶ少女のままのひと

捨て犬の猜疑のひとみ瞬かす
残り火を煽り火傷をしたそう

大和郡山市 森田 カズエ

置傘の骨一本は折れたまま

小説にながす涙を持ちあわせ

目覚しに頼りきる夜のネジを巻く

ハネムーンの二人へながい発車ベル

羽曳野市 塩満 敏

血色が良いと高血圧ほめられる

火星人かくれんぼして出て来ない

福耳の男も指名の顔写真

ああ無情善意の傘が戻らない

氷見市 関 美子

叛かれて眠ったふりをして上げる

湯舟閑談子守のがれた老姉妹

裸木は生の原形風に抱かれ

たてたてよこよこマキシ行く冬

鳥取県 鈴木 村諷子

後頭部あたりご幣を振るけは

焼香にズイと立ったは女なり

農民よそこに居るかと選挙前

奇跡など信ぜず朝の足袋をはく

大阪市 室谷 徹舟

亡命のミグ25へ世界の目

温泉の浴衣気の合うストリップ

祭りより夜店に詣る親子連れ
ナツメロが初恋の顔浮ばせる

橿原市 岩井 本蔭棒

白魚の指で容赦のない注射

球拾うだけの選手で学を卒業

のらくろへ老眼鏡をかけなおし

ちっばけな紅葉でよし庭の鉢

守口市 野呂 右近

春伸びる糧に落葉を敷いて樹々

歳隠す方がロマンがありそうで

亡夫の事或る日の女避けたがり

ええ歳と言う語が足踏みさせて居る

岡山県 白岩 文衛

靴鳴らしせめて今宵は帰らんか

夕焼けが僕の涙を見てしまう

もの言わぬ山の起伏をうれしとも

言い過ぎの言葉を恥じる夜を覚めて

東大阪市 竹中 綾女

善人の仮面で神様欺されぬ

又癖が出たと母の目たしなめる

金婚の枯れた愛をば理想とす

嫁姑の話にはずむバス旅行

出雲市 原 独仙

老骨へ鞭使い過ぎ摺り減らし

老醜のされど心の美は保ち

お帰りの遅い時計よ編目とぶ
縁は異よ足を踏まれたのが動機

米子市 増田竹馬

一年の苦勞一と月の菊日和

夢の続編追って朝寝を起こされる

満開の黄菊明治の香りする

老眼の針をあなどる木綿糸

大阪市 本間満津子

生きる希望もつため過去を書き変える

死ぬときはひとりと遠くへ目を移す

目がほしい小さな秘密もちたくて

新調のふとんふわふわ嬉しくて

大阪市 神夏磯道子

目の見えぬ母へ香りの菊を活け

観光の寺で信心悟らされ

陸橋をのぞけば都会の詩がある

忍耐の日がなつかしい今の幸

東大阪市 市場没食子

年寄りの健康談のそれぞれや

失せてゆく気力かくせぬ皺あらわ

捨てられる運命となった千羽鶴

大阪市 河井庸佑

転勤で雪のくらしにやっと馴れ

遊び方知らぬこどものふしあわせ

浮き草のような暮しに疲れはて

大阪市 藤田頂留子

その昔笑った知恵をまねて居る

夕焼けが今日のドラマを暮にする

秋雨にテルテル坊主も泣いて居る

大阪市 神田秀峰

割勘の分も蚊を口説いてる

大自然寒暑の試練へ愚痴が出る

愛情がベットに移る倦怠期

和歌山市 吉野富子

へそくりも不況の風にさからわず

日記帳うれしい事も綴りたし

孤を愛す女に好きな秋の色

島根県 太田亀甲

旧道の野仏すすきに撫でられて

神無月今日の御縁も出雲から

虫干しに老母若かった頃の柄

貝塚市 行天千代

音立てて崩れ行く我が計画（入院生活）

ゆれ動く病葉に似たこの心

燃えつきた抜け殻捨ててる場所がない

兵庫県 大江秋月

三足の靴無事帰って消灯し

台風が過ぎこおるぎも無事な声

娘の電話途中へ孫の声も入れ

仙台市 川村映輝

仮面脱いだ時の紳士の恐ろしき
就職難落されるための試験うけ
就職に有利と運転免許とる

枚方市 宮川珠笑

満員車母の笑顔を頼りきり
お悔みの本音天寿を祝つてる
堂どうと振る舞い酒に酔えるボス

大阪市 西川誓二

古寺訪えば冬の日ざしが甍射る
忘れ得ずして忘れることの難しさ
某日はフイクシオンで埋めた日記帳

島根県 榎原秀子

祝電の鶴も杵から舞い出しそう
ちちこんで力んで赤く鍋の烏賊
日なたぼこ心の底もぬくもれり

和歌山市 若宮武雄

あすの風問うても所詮秋の空
世間の鬼フォークダンスの輪に居ない
入院手術絶望がふとよぎり

兵庫県 河原みのる

曼珠沙華毒いましめる狐花
産み付けるトンボの夫婦呼吸が合い
秋茄子は嫁がフライにして食わせ

小松市 馬場魚山

らくでないのに銭箱ころがしたよな生活

すぐ消える命七色にシヤボン玉
飛び石に似た雲浜茶屋に釘をうち

大阪市 横地雅風

せめてものねぎらい日曜そつと起き
びんの毛を撫で上げ額の苦を覆う

京都市 山本規不風

晴れ晴れと妻同伴のスナックで
連休の宿に小さく泊つてる

滋賀県 溝口はやを

頼るべき人はお先に灰となり
冬瓜の阿呆の如く化粧する

唐津市 新岡回天子

万目の集注一輪目立つ菊
日本に秋あり菊咲く文化の日

若本多久志

平凡な老いのひねもす糸を垂れ
誘われた釣り魚も知っており

日日新なり老いらくの人生味
今日は何処 家出した子へ流れ雲
天の声もうお迎えが近いぞや

尼 緑之助

秋は秋で街角のニューモード
ノーマナーとなり特急の自由席

駆け足で冬が来るのかまたしぐれ
冷害その他列島ゆれやまず

列島の悲嘆に寒い秋走る

浜田 久米雄

この辺で置く晩酌の酔加減
友達がほしいと思う秋の酒
禁煙の金は晩酌代へ向き
雑念を払いにコップ酒へ起き
思ひ出の糸は静に寝て手繰り

本田 恵二朗

流し合う背の面積違い過ぎ
人生の残り時間が甘すっぱい
ジーパンも鞆に秘めたハネムーン
にぎやかにまたたき合うて里の星
こけしこけし深山の木から生れた児

正本 水客

渦巻いて水は昨日に戻れない
けもの路 木地師の眼にも陽が落ちる
捨て犬の何時まで首輪つけている
かたつむり竿頭が好きな訳でなく
搾乳の余りに無表情な牛の眼よ

橘 高 薫 風

高野山慕情

聖地まだ入口紅葉さんざめく
紅葉燃ゆ黒髪も燃ゆ悲願に似
恋かなし鶯梅の井も墨の香も
墓石暮れて生き身に動く喉仏

川村 好郎

老妻に酌がせるもよし秋の酒
寄り添える縁があつて紅椿
又開きの樽ですがと逃げておく
あんたかてくどなりましたでと妻
叩いたら動く時計と思う日々

小西 無鬼

25年のスカウト育成を終る(四句)
半生の重荷降ろした秋空を見る
永しえに育てよ僕の三指礼
歯一本抜けた気持の日もありて
貫いて止まれぬ僕の心意気
止どめ刺す如し最後に来た豪雨

菊 沢 小松園

考古学終に化石が笑い出す
腹立てたほどには詠めぬ十七字
掌を返せば風は嘯つてた
戯れの石に雀は傷ついた
真すぐに伸びた手からも嘘が見え

西 尾 栞

シャンデリアここはお寺の応接間
刃辺話狐の愛情聞かされる
身体から空気がぬける受話器置く
神さんを味方に入れては孤独
會者定離鹿兒島弁が耳朶にあり

麻生路郎物語

(24)

—戦争と路郎一家—

東野大八

昭和十九年九月十五日、私たち一家は三重県へ疎開した。毎年九月になると疎開した頃のことか脳裡にうずく。それは一つのあますっぱい懐しさでもある。

陽光に輝くB29の雄姿？が、疎開荷物を運ぶ私たち親子のすぐ頭の上を東方めざして飛んでいったこと、はじめて知ったジャガイモのあまさ、タニシのすき焼。魚釣り、どじょうすくい、柴拾い、百姓のマネゴト、何から何まで、すべてが原始生活への逆行であった。

疎開の決行についてはしゅんじゅんしなかつたが、そんな遠隔な地へどうして荷物を運ぶかと言うなやみはなかなか大きかった。大阪から三重県まで疎開荷物を運んでくれるようなトラックはいなかった。たとえ運んでくれるとしても、彼等の申出る莫大な資金と多量の白米の要求には応じたくも応じられなかったのである。遂に私は当時十六歳の三男（

筆者註—麻生一步。次男アートは徴用で呉市へ）を対手に、私たちがその白米を食べることによって私達が運ぶ決心をした。

私は一台のリヤカーを手に入れ、焼失したもう二度と手に入れられない書籍や家具を二回に運んだ。それは朝発って三日目の午後二時でなければ行きつかぬ距離であったが、足にまかせて大和川を目あてに王子へ出て、奈良県を北へ突き抜け京都府に出た。

木津川ぞいに木津、加茂、笠置、大原原、島ヶ原を経て伊賀上野に出た。疎開地はそれから東方一里（四キロ）の山の中腹であったが、とうとうそれを断行して友人をあきれさせたものであった。

私はここに生活の一時的？の根拠を見出し、四、五日分の食糧を手に入れリュックに詰めセッセと大阪への芭蕉の旅をつづけたのであった。私や三男が大阪へ戻ってからも、妻は

疎開地に残った。

その後、妻の疎開は三転四転して遂に奈良県宇陀郡に疎開荷物をあづけたまま、終戦四年半して引揚げてきた。

はじめて疎開してから十年の歳月が流れ、昭和二十九年八月四日を期して疎開荷物を全部引きあげて再びあきれられている。箸と茶碗、イヤ茶碗がなくともカレー皿一枚あれば生きられることを骨身に徹して知らされながら、小さな欲望が捨て切れず、金と時間を費してまで疎開荷物を引きあげてきたことである。人生は簡単には割切れない。そこに川柳が永遠性を持つのかもしれない。

（「川柳雑誌」No.328、昭和29・9、麻生路郎）

路郎一家は、大東亜戦争勃発の際の住所は堺市出島海岸通り二丁目一八二番地で、ここから大阪市西区江戸堀上通り二丁目四六の昭和ビルに通って川雑の編集に当たっていた。路郎一家が、堺みなど、と懐しんだ堺の家は、有恒倶楽部川柳部の橋本破夢造の紹介であったが、入居の際の約束により昭和十八年五月ここを引き払って大阪市住吉区万代西五丁目二五番地に転宅した。

この万代の家は、日本楽器の大阪店の支配人であった川柳人村松夢裡が住んでいたところで、急転直下の辞令をうけたため、路郎一家がそのあとに住みつく形となった。路郎

が葭乃と結婚以来、転宅転居の連続で、この万代の家にたどりついた時が実に十四回目の勘定になる。

ともあれこの家は、路郎一家にとっては終生忘れ得ぬ思い出の住居となった。この家から「川柳雜誌」奉還号を出し、終戦とともに復刊号で再スタートし、そして昭和四十年麻生路郎追悼号をもって、その輝やかしい誌齡四六〇号の幕を閉じることになる。「川柳雜誌」と巨匠麻生路郎終焉の地こそ、この万代西五丁目二五番地の陋屋であった。

「堺みなどの家にいるとき、アート（次男）は呉へ徴用にとられ、程なく大阪の師団に入営することになりました。

戦争ははげしくなってきた。「川柳雜誌」もとうとう奉還号を出し、私達は伊賀上野市から四キロへだてた一の宮の妙慶寺へ疎開いたしました。この寺の住職が出征したので、その留守の寺をお借りすることになったのです。これは、有恒倶楽部川柳部の立川さんの紹介です。立川さんは伊賀上野に立川ペン先の工場を持っておられましたから、便宜を図って下さいました。

疎開先も私達は四度も住居を変えました。第一が一の宮妙慶寺、第二が伊賀上野市桑町、第三が奈良県宇陀郡向淵の川柳家上田翠光氏宅、第四が宇陀郡三本松頓光寺です。

一の宮のお寺の生活の後半ごろから、路郎は大阪の万代の家に戻り、赤目芋やほうれん草などの私の手づくりの野菜を大阪へ運びました。

上野市へ移ってからも荷物と共に、私は疎開地へ残りました。路郎は絶えず往復しました。上田翠光さんのお世話で奈良県へ移ってから、北川春果さんのお力添えでトラックを回してもらい、ようよう私も大阪の万代へ戻りました。静子（アートの妻）に、大阪の市内の地図を借りて見当をつけましたが、昔あった橋はなく、堀は埋められたのもあって、おまけに交通網が入り乱れてサッパリ見当がつかずダメです。

木津川と安治川が合流するあたりに「はたてくら橋」というのがあった筈だのに見当りません。グレンシヨウ氏が、昔の川口町のことを詳細に英文で紹介している「なにわのあし」という本を、中島小石さんから借りて読んだことがありましたが、それには昔の街のありさまが鮮やかによみがえってくるように描かれていました。

木津川を渡って居留地へ行くまでに大阪府庁があったと静子に説明したら、そんなところに府庁がおますかないな、大手前だんがな、といいました。」（葭乃書簡）

「あの戦争で五女の梨里は、会社の寮が戦火に焼かれ、京都山崎まで時限爆弾の中を走

って避難した経験を持っていますし、奈那（四女）は、和歌山で空襲にあい、紀の川で半日以上つかっていたと申します。中国のような広い国ならば、戦争はどこでしていいのかも知らずに暮らしている人もいるでしょうが狭い日本の空の下で、戦争のときも平和に暮らせたことは嘘のようでごさいます。敵も相手にできぬような山村僻地に私はいたのでですから……」（同）

「私が第四回目の疎開地大和頓光寺の別棟に居りました時は、朝も昼も鶯（うぐいす）の声がかきこえました。雷鳴はげしい夜などは宇陀川の流れてそうた山々へ稲妻の走る壮観は、キネオラマでも見ている様でした。平素は何の物音も聞えぬ静けさでありました。

「こんなところで一日いたらさちがいになつてしまふ」

と亜鈍さんがいわれたことがありました。

— 鬼あざみ 無縁の墓を淋しうす 葭乃

この旧作はここで生れた句なのです」

（同）

「回顧すると太平洋戦争の苛烈な昭和十九年九月十五日に私一家は一の宮の妙慶寺へ疎開した。

私は終戦になってから大阪へ立ち戻り、荊妻葭乃は上野市桑町に移った。その後、連絡に不便を感じたので、上田翠光氏のおっせん

で葎乃は奈良県宇陀郡三本松村の頓光寺の離房に移った。昭和二十年十一月十六日のことである。

ここは非常に景色の美しいところで、山また山に取囲まれているし、脚下には宇陀川が流れている。ここへ移った時、私は障子を開いて前方に折り重った山また山の美にうたれ思わずくちずさんだのが

——名も知らぬ山の起伏をうれしがり 路郎であつた。

葎乃は二十四年十一月に帰阪し、荷物は三本松村向淵の翠光居の二階にあずかってもらった。向淵は頓光寺から二里半(約十キロ)の山上であり、近鉄の室口大野駅下車、北方へ一里余(約五キロ)である。

今回そこへ句碑が建つことになつたので、同じ三本松村であるし、眼界はどこまでも山の起伏であるところから「名も知らぬ」の句を選定したのである。」

(「川柳雑誌」No.280・昭25・9号・麻生路郎)

この句碑建立については、路郎句碑の項についての稿で後述するが、ともあれ路郎一家の戦時疎開に、よくねんごろに面倒をみたのは門下の上田翠光であつた。

翠光は大阪で工場経営を行っていたが、応召のため廃業。復員後は戦死した実弟にかわり三本松で百姓をする決心をする。こうしたにわか百姓の生活の中に路郎を招き、夜半ま

でよく川柳を語りあつたという。こうした縁から、翠光は「先生のための一庵建立」を思ひたち、路郎に相談したところ

「庵などとは聞いただけでも隠遁的だ。同じ作るなら大衆のためになる建設的な施設がよい」

と一蹴され、結局、恩師への記念に句碑建立を発願したのだという。路郎句碑では二番目で、昭和二十五年八月三日不朽洞会員多数が集り句碑除幕式をこの山上であつてゐる。

昭和二十年の終戦の年は、路郎五十八歳であつた。この年から路郎は、それまで愛用していた戦斗帽を捨て、本来の無帽主義にかえつてゐる。

「戦時中には、私たちがよく挙手の礼をさせられる機会が多かつた。しかも平気でそれをやっていたのである。今から考えると一寸滑稽に感じられる挙手の礼であつたが、不自然というよりも、その頃の生活状態にピタリと調和していたのである。

最近S消防署へ講演に招かれ、帰る時サイドカーに乗せて貰つた私へ、署員が一齐に挙手の礼をもつて見送つたので、私も反射的に挙手の礼を返した。無帽の私は天皇陛下のように帽子をさしあげて答礼するわけにはいかなかったのである。考えてみるとこの場合お辞儀をするより挙手の方がよく調和しているように思う。

作句にしても素材の調和、言葉の調和、音調の調和など巧みに塩梅されてはじめて佳吟が得られるのである。時には破調の佳吟がないでもないが、それとても厳密に言えば調和を破ぶつて第二の調和を形成しているのであつて乱脈を意味するものではない。

私たちが三重県へ疎開していた頃の経験に、農家へ有形(衣料品)を与えるがすぐ有形(食料品)で返してきた。ところが無形(知識)を与えても何等返してはくれなかつた。私は有形を与えるも、無形を与えるも返して貰うことを予期して与えたことは一度もなかつたのである。

(中略)概して文化的感觸の問題だが、無形の価値を評価し得ない人たちが、過少評価される人たちがうける損失は小額とはいえない。文芸人の多くが富裕でない原因はこんなところにあるのである。しかしその罪が一方的でないことを認めないわけにはいかぬ。

文芸人の思い上つた無形財が真に無価値である場合もあり、また有価値であっても所謂猫に小判である場合もあるからである。特に恒産のない限り右に述べたような理由で文芸人の多くは清貧に甘んじなければならぬのである。殊に短詩文学で生活することの容易でないことは言うまでもなからう。」

(「川柳雑誌」昭和25年8月号/窓口/麻生路郎)



入江 勇

誹風柳多留廿五篇研究

—(十三丁)—

217 よし原へそは喰に行きつい事

西原—三ッ布団贈呈者のこと。次の句も、
夜具布団吉原中のそはを喰 拾六・16

『柳花通誌』などによると、女郎へ三ッ布団
を呈した客は、店中全部へそはを振舞った。

「きつい事」は、「痛シ」という事をキツイと
云、甚の意なり」（『俚言集覽』）であつ
て、次の類句もある。

我夜具へ女郎を寝かすきつい事 二六・42
室山—贊。「きつい」には、(1)おびただし
い、はなはだしい。(2)きびしい、つらい、ひ
どい。(3)たいへんだ、驚くべきことだ。(4)感
心すべきだ、すばらしい。の四つの意があろ
うが、ここでは(3)に(4)をやや加味した意であ
ろう。

岡田—「きつい」は室山氏のいうように「大
したものだ」の意。

218 わらしの儘て川留の咄し也

西原—旅戻りの句。旅の苦勞も數あるなか
に、帰る予定日の遅れた理由である川留めの
事は真つ先きに云わねばならぬ。とんだ誤解
もうむからである。よつて、わらしのままが
生きてくる。

奥様にお指折らせる川つかへ 二九・26
室山—贊。しかし「誤解をうむ」云々までは
いかげであらう。要は帰宅が遅れた理由を述
べてたてているのだらう。われわれが乗り物の
都合でおそくなった時と同じである。

清—同。あわただしい帰宅風景。
青木—贊。旅での最大事件。ニュース・バリ
ユウ(報道価値)のあるものは、何を置いて
も、口外してしまわないと腹の虫がおさまら
ないのが人間であるらしい。

足洗う湯も水になる旅戻り
岡田—贊。 一・4

西原 亮・入江 勇・紀内 恒久
鈴木 黄・清 博 美・青木 迷朗
室山 三 柳・八木 敬一・岡田 甫

219 百さしきかと思れ八隣の役者

西原—芝居小屋で、舞台の正面の二階を向棧
敷といい、更はその奥が一人百文の迫込み席
で「百棧敷」である。

百出してむしの動くをつんば見る 三八・35
役者のセリフなど聞こえぬのである。一名
「つんば棧敷」ともいう。

ありやあ誰だへ〜と百棧敷 安八・礼11
そこで、舞台へ向つて、大声で「成田屋ア」
などというから、棧敷から、今の声は百棧敷
からだなど思つて見ると、全くそれにふさわ
しく、隣の小屋の役者をどなっているという
景。プログラムも持たず、芝居もわからぬ者
の集まる百棧敷では、さもありなんとの意ら
しい。

室山—『川柳江戸歌舞伎』の劇場平面図を見

ると、「百棧敷は東側に片寄っている。当時の芝居小屋は、今日の劇場のように防音のできる立派な建物ではなからうから、舞台にいない役者をほめる声が聞こえたので、礎解の示すように「また百棧敷の奴か」と見たら、そうでなくて、「隣の小屋の役者への声が聞こえて来たのであった」というのではなからうか。恐らく、こちらの小屋では満場声なくといった場面でのことであろう。

岡田―「隣の役者」はやはり室山氏のように、隣小屋への大音声とします。

220 いつきかしづかれて柳ばしハもて

西原―「いつきかしづく」は、大切にして養い守るとか、目をかけるの意で、ここでは「手厚く扱う」義。この語は『竹取物語』にも見える古い言葉で、『源氏物語』の「ひとりいつきかしづき給ふ御心」（紅葉賀）などともみえる。すなわち、雅言を使ったところが、この句のミソなのであろう。

柳橋は船宿があり、吉原への猪牙舟の発着所であった。その遊客に接する船宿の態度を云ったものである。

真実と嘘でかためた柳橋 一五・二
五九・三

船宿の女房立たせて置いて縫ひ 一〇・二四

室山―贊。その客が吉原へ行けば振られる可能性大というのがミソであろう。礎稿の例句第一句は「気に入らぬ風もあらふに柳かな」

(千代)のもじり。

岡田―「柳橋はもて」ですから、柳橋ではも

ても吉原では……のふくみがあること、室山説の通り。

221 近松斗りハ作者の一本木

西原―「一本木」は、『東海道中膝栗毛』に「こないない一本木の米ばかりのめしは」とあり、純粹な様をいう。本句は、人形浄瑠璃の作者の近松門左衛門を讃えたもので、作者中の第一人者の謂である。「松」と「一本木」は縁語仕立。

雲上に式部地下に八門左衛門

九二・一

あの口に戸が立テられぬ門左衛門

宝八・極一

室山―贊。他の作者から群を抜いて……の意と、合同作がないの義であろう。

入江一同。

我が嘘で感涙流す門左衛門

拾九・九

我が作を立聞をする門左衛門

二・二六

222 蝶くと千鳥を鶴が引あわせ

西原―「川柳江戸歌舞伎」で、西原柳雨は、「建久四年五月二八日富士の裾野の狩場にて不具戴天の父の仇工藤祐経を討取った曾我兄弟の着附が十郎祐成は千鳥、五郎時致は蝶の模様と芝居道では極っている。対面の場、鶴は朝比奈」と説明している。

要するに歌舞伎で、朝比奈の手引きでなされる工藤と曾我兄弟の対面の場を、芝居の紋

によっておもしろく詠んだのである。

室山―贊。「寿曾我対面」。現行のは、後に河竹黙阿弥が補したものである。江戸劇団においては、享保期以降、曾我狂言は正月には必ず出さねばならぬものとされていた。その中でも、この場面は典型的な歌舞伎の様式美にあふれたものである。

入江一同。

蝶々も羽根をば鶴にひっぱられ

三七・七

岡田―贊。

223 只事と見へぬ楽屋の大きわざ

西原―芝居の楽屋では、役者たちが役による様々の扮装をしている。なにか、さわざがおきると、その扮装のまま立ちさわぐので、なおよ一層異様でただ事と見えぬというのである。室山―贊。化粧半ばのものもあろうし。

入江―ある種の事件を詠んだ句と思う。例えば、初代団十郎市村座の舞台にて演技中に、役者杉山半六のために刺殺された事件、あるいは、絵島事件ともれるふしがある。山村座の新五郎の楽屋へ奉行所から差紙（呼び出し状）が来たのである。

清―楽屋の風景のみを詠んだ句であろう。青木―礎稿贊。入江氏の如く、「只事と見へぬ」という措辞から「ある種の事件」を讀者に連想させるところも作者のねらいでもあるうか。

岡田―一般句と思います。観客席がさわぐ事があったても、楽屋がさわぐ事はない。

51年度



同人部

富田林市 岩田美代
 染め替えて羽織は過去を喋らない (2)

松原市 谷垣史好
 ポケットに蜜柑が一つ落着かぬ

竹原市 三宅不朽
 生き難き死に難き貌 檻の鶴

島根県 堀江正朗
 茶碗置く音のまるさや有難し

神戸市 小浜牧人
 てのひらの上のドラマに幕がない

今治市 原田一風

選考委員

中島生々庵
 西尾榮
 若本多志
 川村好郎
 菊沢小松園

正木方客
 戸田古水
 大坂形水
 橋高薰風
 小浜牧人

(順不同)

紫陽花の騙し始めは白で咲き

八尾市 高杉鬼遊
 地の底の母までとどく冬の雨 (3)

大阪市 天正千梢
 一片の雲 流れに交わらず

米子市 八木千代
 信念へ廻り道した日を悔いず

大阪市 金井文秋
 茜雲天地を染めて満ち足りる

神戸市 小浜牧人
 父はかく生きしか白梅の寒に耐え

岸和田市 高橋操子

棟梁の音痴最後をしめくくり

富田林市 和田 維久子

ある時に無智も倅 瞳をつむる

青森市 工藤 甲吉

灰を掌にのせて人間など思い

豊中市 戸田 古方

ひとつぐらい心見る眼にしてほしい

大阪市 川口 弘生

あの人もあの人も居て今日がある

岡山市 川端 柳子

持つべきは子供とおもうそうおもい

香川県 三井 醉夢

一分の黙とうですむ記念日か

宝塚市 傍 島 静馬

ピカピカに研いて切れ味悪くなり

大阪市 江城 修史

軽い日も重たい日もある義理を下げ

大阪市 河野 君子

昂ぶりをさとす白髪の二三本

大阪市 不二田 一三夫

一ぴきぐらい蟻にもいよう怠けもの

八尾市 香川 醉々

千手観世の一手が枕 母眠る

大阪市 川口 弘生

飛んでみて空退屈なものと知り

香川県 三井 醉夢

みの虫よ月の光りを父と見よ

八尾市 高橋 夕花

何一つ飾るものなき足跡よ

鳥取県 清水 一保

そっとペン置けば鈴虫そっと止み

島根県 堀 江 芳子

かたつむり病むなよ殻が負いきれぬ

竹原市 三宅 不朽

花束を買うとき男負けている (2)

生駒市 草 深 醉 升

費うためのお金ですよと妻も老い

大阪市 小出 智子

ところでん大きなよろこびなどいらぬ (2)

富田林市 板尾 岳人

鳥が鳴く方へ振り向く軽い罪

米子市 林 瑞 枝

樅の実の落ちて大樹の夢捨てず

竹原市 山内 静水

言論の自由毒消しいらんかね

愛媛県 村上旭童

夢に見た春はも少し暖かし

神戸市 小浜牧人

スポーツは万能靴持ちとなり

島根県 堀江芳子

心経をあげて気のすむまで座る

岡山県 嘉数千代香

腹のたつ時もえくぼはふたつある

松原市 谷垣史好

ざるそばを食べて革命など出来ぬ

呉市 林野避光

ぬいぐるみ温い童話のつめてあり

倉敷市 松下梁水

おふくろの十指は弥陀の掌にも似て

和歌山市 若宮武雄

今日を稼ぐ軍手左右の主張ない

倉敷市 小野克枝

陽の長さタイムカードは持たぬ妻

兵庫県 遠山可住

管理職手当で忠誠誓わされ

堺市 高橋千万子

チウインガムふみつけふみつけ阿波おどり

岡山県 嘉数千代香

民宿へ泊り仏壇まで拝み

倉敷市 小幡里風

投げ入れの花の素顔に訓えられ

大阪市 不二田一三夫

乱丁と落丁が一冊になる夫婦

新宮市 大矢十郎

神主でさえも神様には逢えず

倉敷市 稲田豊作

新バッジつけて企業の走狗となる

東京都 山根白星

四捨五入の四捨の悲鳴がきこえぬか

岡山県 白岩文衛

女紋女としての意地に生き

八尾市 大路美幸

簡単なことだよゴミはゴミ箱へ

八尾市 宮西弥生

しのび逢う部屋はノックのない世界

新宮市 大矢十郎

目撃者になれぬ私にひまがない

大和郡山市 森田カズエ

冷戦の膝とも知らず猫が来る

大阪府 中村 ゆきを

七人の敵あり君子になりきれず

大阪府 大坂 形水

新聞の休み腹立つ活字見ず

富田林市 岩田 美代

こんな時の私が嫌いで顔洗う

(以上の句は路郎賞候補作品の最終選に残ったものです。同一句は割愛しましたが、以下の点数には入れませんでした。三回の中間発表から二句までは一句、四句までは二句、六句までは三句編集部選で発表します。なお、発表句の下の数字は推薦者数です。)

八尾市 高杉 鬼遊

教会のローソクだから揺れはせぬ

富士の山だれが画いても富士になり

花好きのそれほど花の名を知らず

下り坂小さな花が眼にとまり

生々流転蓮の上なる露ひとつ

落ち椿夜更けの部屋の耳となる

岡山県 嘉数 千代香

つまずいた石の言葉を聞いている

曲り角の蟹に重たい鉢です

今日を積む積木は今日のうちに積む

昂ぶりを消す洗濯を白く干す

竹原市 三宅 不朽

人形の笑ったままで蓋をされ

この町の素顔のひとつ螢とぶ

汗キ拉里男の素顔極まれり

八尾市 宮西 弥生

モナリザの過去が知りたい日の微笑

札束で買えない自由の地図を描く

白旗を振つてときどき雌雄の和

富田林市 岩田 美代

水吸うて水吸うて古木同土なり

節くれの十指を見られまいとする

松原市 谷垣 史好

元日や場末の如き湊町

本棚に心貧しき書が並び

完璧な駒組み自ら動けない

香川県 三井 酔夢

青年の人生感に撫然たり

くちなしの花に介錯しいられる

大阪府 不二田 一三夫

傷口が癒えると人をまた信じ

父似か母似か 亀の子目がさびし

人間のまわりに人間多すぎる

眉目秀麗の悪党もありはあり

桜井市 岩 本 雀踊子

ゆずられた席で老人ねむくなる

退化する男の髪は長かりき

夫婦して積木のゆれをかばい合う

神戸市 小 浜 牧 人

埋れ木となる父親で死なんかな

番犬を飼って他人を信じない

青森市 工 藤 甲 吉

天と地と人 嘘つきは人ばかり

この上のなき安らぎは我が枕

聖人のようなくらしをバカという

八尾市 高 橋 夕 花

枯草の匂いを愛の果てとみる

母に似た古い女の鍵を持つ

神戸市 中 村 ゆきを

夏雲に語りつぐべし戦没記

真実はひとつ新聞を膝に置く

新宮市 大 矢 十 郎

クーラーの部屋で工事の指図受け

金で済まぬ金で済まぬが金ですみ

宝塚市 傍 島 静 馬

北山杉気ままなポーズ許されず

落魄の父はアルバム見たがらす

八尾市 大 路 美 幸

愛瘦せて妻の寝息を聞いている

政治家のみそぎは黒い靴のまま

島根県 堀 江 芳 子

退院したら話したいことみんな消え

富田林市 和 田 維 久 子

本当の答は神にまかしく

ノーという勇気が厚い壁やぶる

三重県 川 上 大 輪

雲を描く少年雲に抱かれる

花束を抱いても少女に戻れない

今治市 原 田 一 風

こそばゆいとこに女が残ってた

大阪市 小 出 智 子

一枚の紙の重さを知る夫婦

堺市 野 坂 つき子

あじさいの彩に告白したくなる
花屋から春の顔して出る男

大阪市 江城 修史

身構える暮しへ稼ぐ詩があり
掌に残る居職の温くみ詩にならず

倉敷市 水粉 千翁

散るもよし一期一会の秋の彩
信念を通す重さで浮き沈み

大阪市 川口 弘生

隅っこがよく稼いでいる赤電話
社会との絆を知った救急車

大阪市 柳原 静香

海の蒼 吸殻一つ捨てかねる
役立たぬ正義感ならもっている

和歌山市 若宮 武雄

山の高さ知らないままの蟻でいる
駅前のおどん屋乗る汽車聞いてくれ

京都市 都倉 求芽

虫のようにからっと乾いて死にたいな
虫が鳴くのでごみだめを振り返る

大阪市 有信 新之助

色も香も秘めて尼僧の悟り顔
生駒市 草深 醉升

大阪市 本多 柳志

全身で女 見つめる猫目石
左遷の地ここには蜻蛉も蟬もいる

倉敷市 野田 素身郎

細くとも流れておれば川である
直立の針を女の胸に持つ

倉敷市 小野 克枝

倅せは顔まで育ての親に似る
おや生きているやないかと水をやり

岸和田市 高橋 操子

とつおいつするとも知らず自動ドア
芋虫の頃もあつたと蝶おもう

兵庫県 遠山 可住

藤井寺市 西 いわを

争いの嫌な男を牛が好き
和と書けば角がとれてく墨にじむ

鳥取県 鈴木 村諷子

人生を夕陽の如く沈まんか
西宮市 若本 多久志

大阪市 中川 滋雀

泉大津市 村上春巳
はぐれ鹿もしや革マル派かも知れず

倉敷市 稲田豊作
庭石の苔を老醜とは言わぬ

富田林市 板尾岳人
滝つらら山の男は汗が落ち

竹原市 山内静水
爪を切る女ちかごろ絵にならず

(山下梁水氏、河野君子さん、山根白星氏の推薦句は同一句
につき割愛しました)

一般の部

島根県 安達潮音
お早ようと豚は正しくささやいた (2)

高槻市 山田スミ子
てのひらの温みも投げたお賽銭

寝屋川市 江口度
本当の甘さは塩が知っていた

橋本市 森脇善彦
虫一匹殺さぬ花の短命さ

泉佐野市 大工静子
つまずいた石は可愛いいたまご形

和歌山市 樫村ふみよ

あきかんもねころんでいる春の土手

吹田市 藤原世史春
花らつきよ小皿の中を逃げ廻り

大阪市 芝原路春
ニヒリストきれいに魚たべ了える (2)

竹原市 鈴木かつ子
枯れたふりして雑草は春を待ち

今治市 渡辺南奉
灯を消せば嘘が上手にかくせそう

岡山県 船越洋之
胡桃にも弱いとこあり真二つ

倉敷市 高山みどり
はじめからしまいまで花の長話

豊中市 高橋古啓
母の壺泪と汗と梅干と

西宮市 杉浦婦美子
若竹のひと節ごとにある気魄 (2)

尼崎市 中谷利美
成仏をした貌でなし冷凍魚

滋賀県 柚木踏草
母の日のクレパス偉大な豚を描く

和歌山市 桑原道夫
昼下がり時計をゆるく巻いている

和歌山市 松原寿子
耐えること慣れて人形の顔をする

寝屋川市 柴田惠美子
小気味よく喰べて女は強く生き

島根県 松本文子
手を合わす老女哀しみこぼさない

大阪市 那須鎮彦
合格は合格同士肩を組み

大阪市 松本甫久路
さざ波の一つ一つにある夕陽

新見市 吉田落猿
目が覚めると今日も鼓動が鳴っている

豊中市 安藤寿美子
おふくろと言う愚さにいてたのし

尼崎市 中塚喜甲
心中の鬼にぶつける豆がない

八尾市 納史葉
愛憎の果てにナイフが置いてある

唐津市 山下勝一
浮き草も流れてるうち花が咲き

(以下中間発表三句、四句、五句の方々のなかからそれぞれ推薦しました)

豊中市 安藤寿美子

喜びをこぼさぬように指にぎる
おみくじの凶を今ごろ思い出し
冷飯を犬とわけ合い一人の夜

豊中市 高橋古啓
月見草吾が半生は酔うたふり
闇よりもあかりに揺ぐ影こわし

寝屋川市 江口度
蟬はなく残り少ない木にたかり
溜まる不満で風船をふくらます

滋賀県 柚木踏草
ドライな音たてる大仏修理殿
運命線どこかに幸福駅もある

和歌山市 桑原道夫
笛持てば笛で指図をしたくなり

柏原市 小谷葉子
秋に咲く桜をふいと憎くなる

大阪市 芝原路春
どん底で二月の草の匂い嗅ぐ

八尾市 納史葉
階段に噂が落ちている団地

和歌山市 松原寿子
決意する目と目に言葉などいらす
(河野君子・小出智子—整理)

水煙抄

川村好郎選

和歌山市 松原寿子

分を知り秋の女になってゆく
石投げて波に逆う日を重ね
憂愁の絆のもろさ知る日記
うわ澄みの言葉を揺する秋の風
季節を知る花優艶に炎えて逝く

八戸市 安田 絃

青田茹るコンバインの音リズムカ
母となる準備へ亡母の音がする
左遷から空気のうまさ言うて来る
脛かじる息子の理屈理に叶い
満場一致ここにも嘘がある

尼崎市 駒村 岳 麓

嫌がらせ自分が思う程人に受けず
良き友になつてと恋のスタート
カーブ避け女の道を全うし
収入増下手の洒落も口に出る
急行が停るようになり川濁る

豊中市 安藤 寿美子

くもの巣の蜘蛛の昼寝をさまたげず
ある日 石 雲になりたいなと思ひ
気に入らぬ女が坂を這いのぼる
そのうちに着くさと川はあわてない

和歌山市 西山 幸

おおらかにとぼけ秘密の距離保つ
祭礼の提灯にある過疎の意気
かと言って三猿になる勇氣なく
思いつめた言訳だから信じよう

唐津市 岩下 照 沖

夜の紅茶母子解け行く角砂糖
共稼ぎ夫婦笑顔ですれちがい
ふくらめる餅を見つめる子なし妻
陽へ土へ詫びて大樹が枯れて行く

今治市 渡辺 南 奉

爆弾は不発妥協をして戻り
損得を言う陶工で伸び悩み

一步前進ペースは遅々としていても
父が居てくれたらここで出す代打

鳥取県 福田 靖子

細工など出来ずエリートから外れ
挑戦を受けて立つ氣を妻いさめ
帰省子へ母はまだ喰えもつと喰え
記念樹へ少年の日の唄があり

高知県 瀬戸 海州

少年の一途とがめはずにおき
木屋の匂い見つけた小さい秋
小数の正論砕く民主々義
捜査班目なし達磨となる時効

竹原市 鈴木 かつ子

あこがれた人も孫つれクラス会
会いたいと思えばつる愛の距離
北風が吹けば私の過去が舞う
噂だと思ふ浮気が気にかかり

大阪市 欄 蘭

スリッパを揃えただけのノーチップ
定退へ今年最後の師走なり
ペダル踏む足軽ろやかにデートの日

西宮市 杉浦 婦美子

サングラスとれば柔和な瞳に出会い
石庭に心ひとつが纏まらず
葉鶏頭昔話に飽きました

大阪市 野田 君枝

こんな時ほんと出したい金がなし
泣くところを現代子は笑うだけ
人の世に騙され抜いて来た笑顔

弘前市 小山内 貞男

冷害の対策本部お茶ぬるし
かえらざる水にも似たるむなし日
愚痴やめて見上げて見よう青い空

大阪市 前川 玉子

手応えがあろうと無かろと招き猫
手応えがあると店員つきまとい
野良犬に組しやすしと住み着かれ

愛媛県 宮尾 みのり

栄転にして万歳で送り出し
旅芸人に似て転勤の荷を運ぶ
転勤のせめても人のあたたかさ

寝屋川市 江口 度

もう白くならないハンカチだいている
育つ娘へ親の時計はおくれ勝ち
鍵かけて心貧しくなってくる

羽島市 伊藤 静枝

棟方展女人ぼさつのあでやかに
裏に植え前に移すも楽しみに
泡立ち草よくよく見れば美しき

東予市 小山 悠泉

主導権妻に任かせている平和
秋風が一層身にしむ災害地
中年の悟り上司に逆らわず

八尾市 田中 紀美代

雑草の踏まれ踏まれてらしく生き
爆発を待っているのは女かも
正義観悪人なりに主張する

倉敷市 藤原 健二

淋しさと隣り合わせにある自由
禁断の実は少年に甘すぎた
誘惑の罟 少年の眼に入らず

豊中市 高橋 古啓

意志のまま咲いて優しい野菊なり
この胸に乳房がふたつ傷ついて
淋しくて戸口戸口を叩く風

柏原市 小谷 葉子

疑惑の底で女仮説を組立てる
冬木立聖者の真似をしてみた
護歩して出るハミングの二つ三つ

寝屋川市 柴田 恵美子

一と言を減らせばお腹に気が溜り
血はやはり濃かった女の意地捨て
スランプへ秋の本屋をはしごする

東大阪市 崎山 美子

この余白うめる思案がつかぬまま

しなやかな指にみとれる奈良の寺
家出した母へ父子でたつマイク

大和高田市 岸本 豊平次

夕顔が今宵一ト夜を白く咲く
仕合せを日記の余白が知っている
子の苦勞してみたいと言う人もある

岡山県 長尾 保

漁火に集る習性哀れとも
実の入らぬ稲 仲秋の暗い月
名犬で恋の自由が許されず

西宮市 井上 のぼる

底冷えに妻も盃持ってくる
一生が始まるドラマケーキ切る
なるようになるさと気力のない男

唐津市 三浦 ひろ坊

自信過剰の男ありけりよく喋り
法網を破る刃物は診断書
自惚れがもとで背負った後遺症

鳥根県 松本文子

透きとおる想い出の儘去った人
ここからは夢としてのみ許される
人生の片道切符あとわずか

大阪市 文川 野生

名目を拝む此の世を拗ねてない
信じ合う二人にいらぬ愛言葉

大臣の相を持っている乞食

大阪市 文川 一念

政治家のエゴ丸出しのテレビ見る

和と書いた額に埃が纏いつき

松茸の親指程度に秋を嗅ぎ

姫路市 大原 葉香

四捨五入五の倅せかみしめる

秋空は無縁ノルマへのあせり

自転車に幼な子二人母強し

八尾市 小川 洋子

再会の距離そのままのお茶の冷え

礼束の方に白羽の矢を放つ

親ゆずりの美貌を糧に出来るひと

松原市 北野 久子

ポケットの中でご祝儀撫でてみる

Gパンに老人席を占拠され

好きな人の特長鏡でそつと真似

吹田市 藤原 世史春

狭い膝へ猫は上手に寝てしまい

並ぶほど安くもないのについ並び

失職へこんな冬が早く来る

岸和田市 津田 千舟

北海道旅行

名調子旅を倦かさぬバスガイド

洞爺湖で妻と漕ぐのも久し振り

山口市 高崎 雀声

美しい言葉残して上司去る

秋晴れが誘い出してる老夫婦

名古屋市 大林 曲ん手

風船のひとり歩きも風が要る

してあげる何も出来ない墓掃除

出雲市 藤井 晴月

格言にわたしの倅せ確かめる

愛憎の果ての三面記事を読む

豊中市 田中 善四郎

役立たぬ満期保険に感謝する

炊事する妻を偲びて炊事する

備前市 武内 雅堂

考えるおんなの膝の冷たさよ

美しい出合いこころの糧とする

岡山県 池田 半仙

唄声に紅葉コーラスしてくれる

信号は赤のに愛が燃えている

新宮市 西尾 功

地の底の母にもとどけ虫の声

妻の留守娘がいがいし割烹着

羽曳野市 岩橋 双虎

カセットで心経あげると命日

年金が少しあがった植木鉢

松江市 梅本 登美也

わが影におびえ月夜の蟹細る
花そつと棒ぐ人あり女人塚

八戸市 島田 昭治

花咲かぬ雑草に似る我が半生
月給を聞かれお手盛して答え

鳥取市 岸本 無人

母だけがテールランプをまだ送り
かんしゃくにもつれた糸がむきになり

和歌山市 樫村 ふみよ

ハツとする老見せられる窓ガラス
飲まずともほんに女はよくしゃべり

羽曳野市 麻野 幽玄

すきなこと云える平和をはきちがえ
嬉しさにも涙線ゆるむ歳となり

倉敷市 松井 俊風

夕焼けの海に真実語りたく
つじつまの合った言訳疑われ

大阪市 山田 喜代子

借金が無いだけで来たわたしです
借金を断る方も泣き落し

大阪市 中辻 千子

借金も男の価値と空元氣
ほろくそに言って反応たしかめる

大阪市 山本 炳彦

借金をして張りのある日々となる

ラブレター返事来ぬまま秋が来る

大阪市 須浦 つね

金貸して気をもんでいるお人好し
大都会隣りは何をする人ぞ

尾鷲市 渡辺 伊津志

模範車を後の車のがはがゆがり
よく値切る客用の品用意する

羽咋市 三宅 ろ亭

コウロギよ何喋りたい膝に来る
寒さもう妻戸まで来て今晩は

橋本市 岩倉 天彦

うっかりとしてましたんやとするお辞儀
入門書ばかり集め浅い知恵

今治市 園部 正則

抵抗の夜は沈黙ひとり臥し
苦勞して儲けて使い道違え

亀岡市 森 和堂

温みまだ残る握手に心揺れ
家の灯のウイंकに心満ちている

竹原市 大島 花炎

コオロギと今日も語ろうしまい風呂
台風一過大きく秋を舞うトンビ

七尾市 松高 秀峰

公害を騒いで金を目当てにし
体育の先生校長へ縁遠く

いつの日か挑む社会の隅に生き
降り続く雨も失意は流せない

鳥取県 大坪 天涯

父権地に堕ちて自分の部屋がない
投げ売りもならず利息を払う土地

岸和田市 池田 香珠夫

本心は世辞でよかったエチケツト
無愛想な返事落ち目へ突きささる

今治市 薦本 昌道

人間味とみに薄れた合理主義
お守りは紙きれに判押しただけ

出雲市 高見 鐘堂

にやにやとする人柄にだまされる
灯明に遊ぶ蛾亡母の化身とも

尼崎市 中塚 喜甲

残るより赤字でなければそれでよし
ミグの波受けて日ソはどうなるや

唐津市 田口 虹汀

空の碧無心に高く災害地
風と組む雨は人智の域を越え

唐津市 松垣 岩光

お祝が続く赤字の家計簿
鼠目で見ても初代に程遠い

青森県 波 ただお

この金を使いなさいと夢に見る
節約のムードで国体ひきしめる

唐津市 岩崎 寛

停退のポケットでハンコ欠伸する
ある時間波と語ればしこり解け

岡山市 井上 柳五郎

病院のベッドは老の憩い場所
ピーナツせめて本物食ってやり

唐津市 山下 勝一

親馬鹿からばば馬鹿孫を甘やかし
茶話しの相手が欲しいと老のなぞ

東大阪市 加藤 千代子

自分より小さき母に娘はあまえ
妻病みて娘が急におとなびる

唐津市 桑原 掬治

産声を待つ時長し母なれば
ガラス越し新生児見るもどかしさ

堺市 栗本 藤持

寝てて見る空の深さよ雲が友
痛疾やみテレビが誘う旅ごころ

島根県 安達 潮音

古寺に幹だけ残る明治の木
返信を書く気も重しわれも病み

尼崎市 大垣 たもつ

高くつく安くつくのも女

全てとは思いたくない金の価値

新潟県 高野 不二

ぶつきらぼう売りものにして味は良し

酔ってから歌うに調子良い軍歌

長浜市 白木 まつゑ

老人ホームの日々

皺の顔よくも揃ったホームだな

ハンサムの慰問を受けて皺の顔

北九州市 三上 春雄

安普請の価値台風に教えられ

一も二も親切ごなしもわずらわし

満月に心も丸く手を合わせ

青森県 荒田 つる

年齢の差妻と喧嘩もまださせず

八重洲口どこかで虫が鳴いている

樞原市 西本 保夫

断ち切れぬ思慕鍵盤に叩きつけ

岸和田市 池田 露子

天狗にはなるなと風が吹いている

吸取紙痕跡までは吸い取れぬ

高知市 竹崎 寛

出雲市 板垣 夢酔

大阪市 小谷 清女

腹八分秋の夜長は詫びし過ぎ

大阪市 新川 貞祐

旅やめてつもり貯金とはわびし

須賀川市 平栗 金太郎

仲間割れ真犯人の足が付き

富田林市 中村 優

サラリーが匂う秋刀魚の煙立ち

堺市 堀畑 日々子

五千円と云われ美容院へも足とだえ

滋賀県 柚木 踏草

錆びついたゼンマイ妻は巻いてくれ

島根県 飯塚 虎秋

トンネルを抜けて列車は秋を切り

鳥取県 加藤 茶人

女また未練の香り置いて云に

泉佐野市 大工 静子

へソクリの割にサイフをよく貰い

宝塚市 吉田 笑女

逝った娘の写真へ流行着せて見る

大阪市 平井 露芳

花束を贈って後は考えず

橋本市 田中 恒治

手応えのある子になれと孫育て

敬老会疲れて帰る歩道橋

寝屋川市 福富 隆子

叱らずに笑って通るのが他人

兵庫県 高橋 近江

瓢箪に吸わせる酒が借しくなり

大阪市 村島 秀村

ちよつと飲ませたら喋る軽い口

河内長野市 井上 喜醉

借金も信用という小企業

大阪市 内藤 ますえ

寝ることも体育でした農繁期

鳥根県 岩田 三和

甲斐性と云う借金も出来なくて

四条畷市 松岡 茶々坊

もう一步踏み込めぬ性悔いる夜

鳥取市 勝山 紫宏

借金も大物というゼロの数

大阪市 今井 隼人

除夜の鐘車中で聴くも旅なれや

広島県 原田 篤史

手応えのないやつだが放つても置けず

大阪市 豊島 西城

電車賃出してバーゲン買いに行く

高松市 溝渕 美紀子

円盤の正体見たさにカメラ掲げ

★

大洲市 米澤 暁明

割り切った心に澄んだ空の色

松江市 岡崎 雪美

たのもしさ教えた通りせぬ子供

鳥取市 田中 佐智枝

家計簿の嘘を知らない主人です

小細工の出来ぬ人だと妻誇る

今治市 古野 伶人

即位五十年長すぎるとは失礼な

岐阜市 市川 鱗魚

運動会みんな他人の子他人の孫

今治市 今井 松花

人責める時に足場がゆれている

夫には半額で云う衣裳代

今治市 真山 国彦

戦盲の嘘 夕陽は燃えるいろ
百万弗夜景我家の灯は見えず
身の回り老いはかくせぬ事ばかり

抱いて呉れと手を出す智恵と欲

今治市 伊藤 一郎

どの駅で買っても売店無愛想

東京都 池口 吞歩

産院を出ると実家へ寝に帰り

今治市 大本 バット

売店で買いたくないが買うタバコ
売店の剩銭へ慌てる発車ベル

百人一首と川柳

(30)

富士野鞍馬

九五 前大僧正慈圓

おふけなくうき世の民におほふかな
わが立つそまにすみぞめの袖

この歌は「千載集」に「法印慈圓」として
のつてあるから、法印のころの作である。

慈圓は、藤原忠通（七六）の子で、十四才
で出家し、比叡山延暦寺に入り、大僧正まで
進み、天台座主となった。歌は西行から習っ
たといわれている。嘉禄元年（一二二五）七
十一才で入寂した。「慈鎮和尚」とおくり名
せられた。

この歌を川柳は、
墨染の御門わが立つ袖へ建て

百人中僧侶が十二人居るので

磯川（八三12）

精進が十二十八魚類

如雀（三六18）

九六 入道前太政大臣

はなさそふあらしの庭の雪ならで
ふり行く物は我が身なりけり

この歌は、「落花を詠み待りける」と詞書
して「新勅撰集」にのせられてある。

作者は藤原公経で、この人は、内大臣実宗
の次男で、内大臣を経て大政大臣になったが
出家して覚空と称した。京都北山に西園寺を
建立したので「西園寺殿」または「北山殿」
と呼ばれていた。寛元二年（一二四四）に七
十四才で歿した。

入道が髪を結ってる小倉山

錦袋（七四13）

入道に毛のはへて居る百人一首

孤雲（四四4）

出家はしたが有髪の入道であった。

歌の文句を取って

花さそふ嵐の山へおいでんか

梅島（一の九43）

嵐にも名高き花の名所也

棟和（五八33）

一嵐山

九七 権中納言定家

来ぬ人をまつほのうらの夕なぎに

焼くや藻塩の身もこがれつつ

この歌は「建保六年（一二一八）内裏の歌

華道関西未生流家元

籠 島 総 甫

教室 西宮市北口町七ノ九

電話 六七一六二三六

教室 尼崎市武庫庄浅堀

一五七一八

教室 尼崎市武庫之荘三丁目

一五一一三

武庫之荘文化会

電話 06 四三二一〇七三

合の恋の歌」と詞書して、「新勅撰集」所載である。これの文句取りに、

こぬ人を入れて百人つごうする

(三〇五)

来ぬ人は花と風との間に見へ

里島(二七四)

という川柳がある。定家が「百人一首」の選者で、それへ「来ぬ人」の自詠も入れたことを詠み、前が「花さそふ」で後が、「風そよぐ」であるから、「花と風との間」と詠んである。

こぬ人をぬくは廓の歌かるた

【永治(七八九)】

廓で歌かるたをする時には、「来ぬ人」の縁起をいって、その札を抜いてするのであった。

定家は「千載集」の撰者藤原俊成(八三三)の子で、

女シリーズ

菊 沢 小松園

女ひとり影も落さず消えてゆく
転落の歴史 女の筆が冴え
満足な死顔男の名に触れず
おどおどして愛の切り売り

御父子して千と百とを御えらみ

是亦(二六七)

幼名を光季といったが、のち季光と改め、更に定家と改めた。十四才の頃から宮に仕え、累進して、貞永元年(一二三三)権中納言になった。その翌年天福元年には出家して「明静」と号したが、八年後の仁治二年(一二四一)に八十才でなくなった。

歌人として、俊成の名を辱しめず、その技倆は当代第一と称され、「新古今集」の撰者で、日記の「明月記」の外数々の著書もある。

定家の門にうぐひすないて居る

(一三五)

鶯は時雨のちんをもれて啼き

雨夕(三三二)

鶯の初音はきかぬ小倉山

和文(五七二)

嘘を吐く口紅となり性荒れる
安らかな寢息見詰められてるとは知らず
たまに来て紫いろの匂うひと
ある時の乳房他人の手で慌て
たかが女そんな女に養われ
みそかごと有るかなきかの音すなり

さだまった家があるのに山で書き

(二八二五)

時雨だけ露にぬれるを先きへ出し

木知(七九三)

定家が、百人一首を選んだのは、嘉禎元年(一二三五)嵯峨の小倉山荘時雨亭で、その百首のうち鶯の歌はない。

九十九はえらみ一首はかんがえる

(二二二二甲)

九十九は仮宅百は寮でかき

木賀(九〇一〇)

山荘で三千百字御えらみ

鼠六(二四六九)

百首の中に定家の歌も入れられてある。

黄銅六角ボールトナット
及び特殊換物全般

合資会社
西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL (76) 三四五二、四
夜間 (76) 四四〇八

愛染帖

正本水客選

石だけが底にとどいている波紋
張り詰めた空気 裏切者が出る
心の菊抜きたい観音像を握え

使命感ネジの孤独を支えてる
又一つ灯りが消えて雪積る

次に消す名前を鬼が選っている
次の頁に消せない跡がついている

菊添えて世になき人の名刺焼く
人形の掘り出されたる火事場跡

へちまぶらぶらぶらぶら浮世の外にいる
男対女と見るからややこしい

楷行草 絵にも草書がありまして
訃報来る昨日のままの二上山

裏山で渋柿熟れている孤独
おかめひよっとこ机に並べた日の平和

和歌山市 津田 与史

海のぞむ関羽を祀る支那の寺(神戸散策)

ガスあかり ロンドン製の明治の灯

さようなら明日を信じている私

愛はげし ピンクのYシャツ着せられる

蛇果てり古代文字なる死に様で

鈍感な女に罪が増えてゆく

どの色を着けても母の彩になる

貧しさが貧しい話題積み上げる

押し寄せて来て雑草は負けていず

悩み相談 人間臭いひとが好き

人間味あってエリートおろされる

松茸の値段が大きく書いてあり

人間の理屈は菊に通じない

ミスはミスだがわたしにも三分の理

彼岸花 時雨を呼んで燃えている

再会へ二つの罪となる夕陽

妻入院夜がひたひた攻めて来る

サインズを和服の似合う女が履く

波に乗る男で口笛吹えている

秋の水 人それぞれに昔あり

喪の明けた女に風がふり返える

手だけ洗うて神様に願いごと

女はかなし朱唇に定まる色がない

安らぎを崩さぬ膝にお茶をのせ

婚約をして夕食の仲間入り

里帰り箸の太さにやや馴れて

幸せは遠くに過ぎてから気付き

今頃になってモニターージュが違い

焦立ちを鏡の顔にみてしま

善人の旅 逢うものの多過ぎる

罪科も焼けたと思う骨白く

なんのために君にも僕にもある生命

勝山 紫宏

若柳 潮花

小蟠 里風

岩田 美代

高橋 夕花

都倉 求芽

三宅 不朽

水粉 千翁

田中 紫浪

山根 白星

池田 半仙

古野 伶人

榊原 秀子

大路 美幸

若宮 武雄

津田 与史

新川 貞祐

高橋千万子

出原 敬一

野坂つき子

小出 智子

錦織 文子

工藤 甲吉

宮西 弥生

池田香珠夫

飯塚 虎秋

西 いわむ

河村 日満

黒川 紫香

小谷 葉子

勝山 紫宏

若柳 潮花

小蟠 里風

岩田 美代

高橋 夕花

都倉 求芽

三宅 不朽

水粉 千翁

田中 紫浪

山根 白星

池田 半仙

古野 伶人

榊原 秀子

大路 美幸



澄みきつた秋にも心のぞかれる
大阪市 神谷凡九郎

講義聴く五百羅漢の顔をして
高根県 堀江 芳子

暁から体を剝がすときに秋
唐津市 岩崎 実

ズボン折り意見は聞かぬ気で座る
和歌山市 桑原 道夫

颯爽と旗差し上げてガイド行く
滋賀県 柚木 踏草

雑踏の向うで友が手をあげる
今治市 今井 松花

矛先をかわす煙草をすすめられ
且塚市 行天 千代

金木屋咲けば亡夫が恋しくて
東予市 小山 悠泉

母の生涯 野菊の寂しさとも思い
寝屋川市 宮尾あいき

自信過剰の男ありけり良く喋る
羽咋市 三宅 ろ亭

原発の事故がニュースに火をつける
唐津市 三浦 広坊

真実と言われ煙草の火がゆれる
高根県 安達 潮音

救急車 福祉の歪みと妥協する
羽曳野市 岩橋 双虎

秋愁は未完に了えし恋たぐる
伊丹市 樫谷 漫柳

雑草の生いたち芯に骨がある
大阪府 西出 一栄

和歌山市 沢山 福水

呪文を解けば重くなる荷車よ
備前市 武内 雅堂

愛という字もありました日記帳
大阪府 神夏磯道子

思い出す不幸は尽きず葉鶏頭
和歌山市 西山 幸

蟹満寺 蟹一匹もいてくれず
孫都市 松川 杜的

無事着いた電話のなかに孫がいる
高根県 堀江 正朗

空想のうつらぬ鏡よく光り
豊中市 高橋 古啓

日帰りのバス夕焼ける峠道
東大阪市 竹中 肖二

逢える日の鼓動へロマン抱いて寝る
和歌山市 松原 寿子

缺けた歯のもろさは指でつぶされる
唐津市 竹中 綾女

物価高 祭り太鼓をヤケに打つ
唐津市 山下 勝一

ハッタイ粉 昔の味では無いような
東大阪市 加藤千代子

この人にすべてをかけた角かくし
新宮市 大矢 十郎

落された巣へ執念の蜂が来る
唐津市 田口 虹汀

帯封を抜いて抜ける業界紙
今治市 大本バット

あの頃は良かった目的あって生き
八戸市 紅 葉山

憶測を呼ぶ行動で怖がられ
八戸市 紅 葉山

バーゲンで冬の支度をする庶民
八戸市 小泉 紫峰

植木鉢買って妻にも小さい夢
今治市 園部 正則

故郷の色に不思議と味があり
岡山県 長尾 保

老眼で見付けた善意小さく載り
倉吉市 奥谷 弘朗

結末を急ぐ女にある打算
宝塚市 吉田 笑女

もう一人の俺がさまよう旅の街
大阪府 黒田 真砂

祝開店 先が走れば皆走り
羽曳野市 麻野 幽玄

ゆりかごにゆれる余生の行進譜
唐津市 松垣 岩光

使い捨て亭主の物を捨てたがり
松江市 岡崎 祥月

公害がへったのか水鳥数を増し
今治市 伊藤 一郎

この頃は人許すこと覚え始め
松江市 岡崎 雪美

仲人の靴で釣書年を越し
八戸市 島田 昭治

秋茄子もしおれ夕焼け美しい
今治市 真山 国彦

色褪せた箸を戴く余生の日
平田市 久家代仕男

病人は元気な舌の味ねだる
堺市 栗本 藤持

出雲市 板垣 夢酔

— 同人吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

橘 高 薫 風

誤診とは言わず葉が替えてあり

小浜 牧人

病氣だとして単純なものばかりではない。医者も手探りの治療より出来ぬ場合だつてあろう。突然葉が替わつても、あながち誤診だとは云えぬが、はかばかしく治療へ向かわぬ患者の心理を巧く捉えている。

往診の誤診を飯を喰べながら

路郎

とは違つた立場から見た作品である

金に縁なかつた父の骨白し

中村ゆきを

骨の髄まで齧り切つた人間と云うが、この作者の父君はそれと正反対で、清廉潔白を押し通した一生だった。生前の印象が、死後の骨の白さに接して、作者の感慨を深くするのであつた。

楷行草 仮名も混じて世を渡り

都倉 求芽

世渡りのコツは臨機応変に硬軟を使い分けるにある。齢ようやく不惑を過ぎて、いささか処世の術を心得たかに見える自分なのである。

遠雷が望郷の念つらせる

竹中 肖二

孫のよなナースに媚びる佗しさよ

西出 一栄

作者は共に老境にあるが、感受性に富んだ若若い句を発表された。つぶやくような遠雷に作中の人物も望郷の思いをつぶやく。一栄さんの句には濃い実感がある。

魂がぐんぐん昇る秋の天

高杉 鬼遊

青く澄んだ秋空を見ていると、生ある者として魂が吸い込まれ行くように錯覚する。まして死者の魂は……。どんよりとした空には思いもよらぬ法悦境がある。シャガールの絵を連想する鑑賞者もあろう。天の一字も良い。

廢坑の村に祠が捨ててある

傍島 静馬

抗内の安全を祈つて祀られた小祠も、廢坑となつた今は顧る者もない。「捨ててある」の措辞が適切で、荒廢過疎の風景が目に見えるようだ。

しみ抜きに時間のかかる自民党

久家代仕男

自民党の腐敗ぶりは目を敵うものがある。汚職の容疑者まで立候補するようでは自浄作業は覚束ない。「しみ抜き」とは軽妙なながら当を得て、作者の批判が強く伝えられる。

満天にギリシャ神話のはめてある

小砂 白汀

星にまつわる伝説は、古来、日本にも中国にもあったが、ギリシャ神話ほど絢爛としたものはない。正に満天にはめ込まれた神話と云える。文字の力と云うものは不思議なもので、たった十七音字の作品から、澄んだ夜空の色、星の輝き、伝説にまつわる人間の歡喜や畏怖など、廣大無辺の連想をほしほしにさせてくれる。

札束を固い握手と錯覚し

村上 春巳

金の力を過信する者はこの世に多い。札束を積んで固い友誼と錯覚した人物のみじめさに裏切られる事も多々あるのである。金の魔性を表現して格調の高い作品だ。

老妻を吹き出させたり古日記

本田恵二朗

古日記、或いは妻を見染めた頃の綿綿たる恋情が綴られているのだろうか。すでに忘却の彼方のことも云えそうな往時の純情に、老妻はうれしくも笑い転げるのだ。

— 水煙抄 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

山本素郎

明日へ立ち向う人と約束などしない

小谷 菓子

ゴーイング、マイウエイよノドライに変容した友は、すでに、私とは異質の存在でしかない。もう二度とこの友情がよみがえるとも思えない。遠ざかりゆく友への訣別の譜か。

萩活けてまだ焼酎の匂う瓶

岩下 照神

折節の移りかはるこそ、ものごとにあはれなれ。ものあはれは秋こそまされと人ごとにいふめれど、それもさるものにて（徒然草）ころもにかかると萩も良ければ、四合瓶の萩もまた佳し。まこと、得がたき風情である。

少年よ泣くなら石を捨ててから

桑原 道夫

おとなの分別は、少年には通じない。糸理が糸理でまからぬのも世の常だ。時をクスリ

にするしかない。理由はどうであろうとも、ともかく、石を捨ててくれ。切々、句主のいのりが胸をうつ。

地獄絵をかいて自分でうなされる

安藤寿美子

越後の良寛さん。ある人から、厄難をまぬがれる妙法如何かと問われて『病氣になつた時には、病氣になつたほうがよろしく、死ぬる時には、死んだほうがよろしく候。これ厄難を免れる妙法にて候』と。しかし、凡なる者は、自業自得の数を繰り返してうなされる。善なるがゆえに、だ。

抱擁の背の手に発電するファスナー

柴田恵美子

感度バツグン。五十万ボルトの原子力発電も顔負け。未摘花さえ食指を動かす官能図。

焼香の列黒々と続く義理

江口 慶

矢印の通りに曲るモーニング（三司）を、なつかしく思い出させてくれました。

適材が適所におったつまみ食い

三上 春雄

適所であれば、すべての者は適材だ。無用に見えて他に影響するのが真の適材なのに、ややも、一般の眼は有能の士をのみ適材と錯誤して、発覚後、この意外さに啞然としたり、納得したり、で、不徳不明の布を張る。

適材でなかった適材を皮肉った味を買う。

六十になって今まで何をした

山田喜代子

月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり——

きのうや、きょうという日は、何でもない平凡な一日でした。が、その平凡な一日を集めて人生を作っている。とすれば、何をしながらとも、この平凡な一日こそ、実は、尊い一日と言えるのではないのでしょうか。

無為の身にあまねし雪月花の有情（素郎）ひとつ、ここは天恵に甘えて、花鳥風月を友に、蕉翁よりすばらしい旅を続けようではありませんか。

染めているのにうっかりヨイショと声を出し

藤原世史春

『オホ……』

『何がおかしい！』

『だって、あなた、いつまで若いつもりでも年なのよ。ご自分で、頭のうしろを見てごらんさいな』

『そんなに薄いのか？』

『地肌が、テレてますよ』

妻というものは、しまった、と心で呟いたことまで聞こえているものらしい。

俺に似よ似ると云える子が欲しい

松本 文子

路郎師の微笑がうかがえる素直な引用句。

祖^い谷^や溪^い行

西尾 栞

昭和五十一年九月二十四、五日と高知市で大陸川柳同窓会が開催された。

小松園さんと私は、二十四日の一時に、伊丹を発つてこの大会に参加した。翌二十六日朝、解散と同時に、ふと思いついて奇勝、大歩危、小歩危に足を踏み入れることになった。急拠高知駅へ駆けつけて、窓口で訊くと次の列車は特急で、大歩危駅には停まらないから阿波池田でバスに乗り換えて、祖谷まで行く方が、旅館も民宿もあるからその方が良いのじゃないかというアドバイスを受けた。それで二人は九時二十二分発南風一号の特急券を買った。車中は中学の卒業旅行の団で、すごい混雑であったが、間もなく、ポケットから出したチュウインガムを学生達に配って心安くなった。京都、奈良、大阪への三泊四日の旅だそうである。駄かけに、尻をおろして右に左に変わる大歩危、小歩危の景勝を車窓に楽しんだ。先刻、聞いた駅の窓口の話では、大歩危小歩危は車中から見る方が、降りて見るよりずっとよろしいと言うたので、阿波池

田まで直行する気になったのである。

丁度一時間で阿波池田の駅に着いた。阿波池田は四国の中心の位置にあって、曾て綜合の四国大学が今にも出来るような噂のあった町であるが、その後一向に繁栄せず未だに阿波池田町である。旅袍を肩にして佇った町は巡礼の鈴の音に明け暮れる町といった淋しいたずまいの町であった。

祖谷行のバスを待つ待合所にも数人の人が汚れた板張りの長椅子に腰を下ろしていた。折柄急に暗くなって、ポツリポツリと雨粒が落ちて来た。阿波池田の町と時雨、フトわびしい旅愁が湧いてきた。

十二時七分、案内正確にバスが入って来た。切符を渡して乗った時の車掌は確かに男の車掌だと思っていたのに、発車して前に立った車掌は女になっていたのには驚いたが、今度此方をむいて案内した車掌は又男に変わっていたのには再び驚いた。この頃の長髪と服装が全く男女の区別がつかなくなったことが、こんな淋しい田舎町にも起っているのには我な

がら迂闊だった。

バスの中は、大阪から来たという、男一人に女七人の五十才前後の一組と、私等二人の十人の乗客だった。ここでも小松園さんは、ポケットからチュウインガムを出して、すぐに心安くなった。例によって、冗談と駄洒落の多い饒舌で、時々大きな声で皆を笑わしていた。

バスは四国三郎の大きな鉄橋を渡ると、左へ吉野川を上流へ上流へとハンドルをとった時には碧潭を直下に見る断崖絶壁を行くかと思うと、九十九折の峠路を右に左にと鮮かにハンドルを切った。

先刻の時雨は何時しか止んで、紅葉には、一ト月早い峰々谿々の樹々が、窓外にひらけて行った。発電所があつて、そこからダムが明礬色の水をたたえていた。道端は曼珠沙華の花盛りで、ダムの岸にも屯したり、帯状に長く咲いていた、折からダム放水のサイレンが鳴った。

曼珠沙華ダム放水の鐘が鳴る

祖谷の手前、二十分程の断崖に小便小僧が谿にむかひで放水しているのが、案内書にもあったので、何処だ、どこだと訊ねているのもう過ぎたらしいというので、ふり返つてみると丁度小僧の横の姿がハッキリと秋空のもとに見ることが出来た。なんだ之かと思わず笑ったが、観音さんや地藏さんより愛嬌があつて良いかもねと車中の女が言った。

そのすぐ傍に祖谷温泉が絶壁に臨んで、あたりの景色をほしいままにしていたが、私達

は民宿に泊るといふので、かずら橋迄乗った乗降客は殆んどなく、時たま停る停留所で、二人が乗ると一人が降りた。

阿波池田の町を出てから、丁度一時間二十分にして、祖谷のかずら橋に着いた。十人の乗客は、やれやれ着きましたという安堵の顔で次々と降りた。

バス停をダラダラと下りると、そこには、祖谷の一枚看板、日本三奇橋の一つのかずら橋が、すみきった秋空の下にかかっていた。この橋は一方通行で、橋の袂に老夫婦が仲よく渡り賃をとっていた。一人二五〇円である。前に来た時は、一〇〇円だったのにとぼやいている人もあった。

老嫗の云うのには、三年に一回かずらの蔓で架けかえなければならぬので、それにかずらの樹がだんだんなくなってしまうと、二五〇円は高くないという説明だった。全長四二米、幅二米というかずら橋であった。

私は早速二五〇円を四二で割って、一米六円の渡り賃で、横に渡した板が二五〇枚あったら、一枚渡るのが一円やなアと計算して、橋の袂の人達を笑わした。

綱干の蔓をもって、迫り行く我々渡る姿は実に傑作であった。もう二度と渡るまいと決心するゆれ方であり、おっかなびっくりのものであった。渡りきった所で二、三枚カメラのシャッターをきいて、左へダラダラ坂を上ると、大きな水車が廻っていて、その水車茶屋が今晩私達が泊る、かずらや経営のお食事処であった。今日は日曜日で沢山な人が、水車

でひいた蕎麦を食べ、炬の辺りや、畳敷のところでは、山菜料理、あめごの串焼、でこ廻しを肴にビールをのんでいた。私達はそこで軽い食事をして、十分程坂道を上ったところの、かずらやへと歩を運んだ。

かずらやのお婆さんは、慣れたもので、愛想よく「今日ではあんた達二人だけの泊りやけん、どの部屋でも使わっしやい」と各部屋を開けて廻ってくれた、見晴しの良い大きな部屋へどつかと座り込んだ時は、「矢張り疲れたなア」と二人は思わず顔を見合せた。

窓から見た景色は谿を距てて、向うの山腹のあちこちに、善徳という部落が転々としていた。そしてその山の向うへ、送電線が長く長くのびていた。

民宿の窓に送電線の天高し

先刻下で食事をした時に、乳呑児を背負うて、甲斐々々しく動いている如何にも、それとうなずける平家の落人の血をひいているという若いお嫁さんのことを、茶を淹れにきたお婆さんに訊ねると、あれは妾しの孫の嫁ですけん、背の子供は曾孫ですら、妾しは六十五才じゃけん、もう曾孫が三人も居って、かずら橋の渡り初めに、私等夫婦に伴夫婦孫夫婦、三夫婦揃うて渡りましたんよ。と無雑作に話したのは、流石秘境を訪ねて来た思いを一入深くした。

『大きな風呂が故障ですけん、家の方の小さい風呂で我慢さっしやい』というので、五右衛門風呂かと訊ねると、怪訝な顔をするか、小松園さんは、五右衛門風呂の説明にか

かったが一向に通じない、通じないままに、二人は手拭をぶらさげて藁葺の母屋の方へと石段を上って行った。コスモスの咲き乱れる庭と水貯めの小さい池の間を行くと左の端に湯殿があった。何やかやと置いてある上の棚に浴衣をぬいで、風呂の扉を手前へひくと、二人はアッと驚く為五郎であった。そこには水色に塗ったポリ風呂が湯を満々とたたえてあって、タイルボンドであった。コックの向うにプロパンガスのボンベが五六本並んでいた。五右衛門風呂の通じなかったのも尤もだが、秘境の夢も一べんにさめた。でも旅の疲れは風呂に限る、二人はほてった顔を夕風にあてて、暮れるに早い秋の庭に出た。

やがて部屋に戻って、腕時計をつけていると、小松園さんは『菜さん、今何時？五時やなア』ときいたので時計を見直して、『今丁度六時や』と言うと、『僕なん、一時間遅くれているわ、五時になっている』という返事が戻って来た。

『小松園さん、あんた何時も遅れてくるのんあんた悪いんやない、時計が悪いんねんなア夕べ童頭巻くのん忘れたんと違うか』

『そうかも知れん』

『今度、皆なそういうとくわ』

『たのんまっさ』

一時間進ませたおいて丁度よい加減やのに一時間も遅れていては、小松園さんも立つ瀬がない。

パンフレットで見た、あめごの串焼と、でこ廻しを夕御飯に食べさせてくれと頼んでお

いたので、間もなく用意が出来たからと、先刻話しかけた、二十一才の孫さんが車をもつて迎えに来てくれた。

夕ご飯は水車茶屋の方で食べるのであった。早速上りこんで、囲炉裏を囲むと、主人の細君を初め、昼間の赤チャンを負うた若嫁サンに、主人の妹の十八才になる昌チャンの三人で、色々とご馳走を運んでくれた。先ず蕨蕨のさしみ、生椎茸、ワラビ、筍、うどの山菜料理の一鉢、そば雑炊、ツボという魚の照り焼、ご飯と香のもの、之が今日の泊りの、二、五〇〇円の夕食の献立で、あめごの串焼とでこ廻しは特別注文料理ということになっている。

囲炉裏の火が段々赤く燃えると、あめごがそり返ってくる、それをきりつと廻してこちら側を火にあてる、でこ廻しというのは、馬鈴薯の丸のまま蒸して皮をむき、それに山椒を入れた味噌をぬって、端へ立てて、くるくる廻して焼き上げる、だからでこ廻しという、味噌に山椒がきいてすばらしい味である。色は黒いが腰のある蕨蕨のさしみも旨い。お目あての、あめごの焼けるのも待ち遠しい、大きな田舎徳利に大きな盃、地酒が人膚程に温もつたのを一気にあふる。かねてこの情緒を嬉しみに待っていたのが、今宵実現した嬉しさに盃の数が重なる、酢だちのかけたアメゴ（地方によって山女、あまごという）の美味しさに、もう一串注文する、早速孫息子が手網をもつて暗い外に出てゆく、なんとも言えぬ素朴な雰囲気である、そこへ、この

主人が帰つて来て、炬の向うに座った。

よう来て下さった、今夜はゆつくり飲んでつかわさい、と言う。そして、お客さん達は正についているという、もう少時すると、紅葉の客が立てこむとこんなにつつくり炬を囲んでもらえない。

『さあ一杯やっつかわさい』と銚子をもつ、そして細君に銚子の追加、追加を命じて、そこへ下の土産物売、琵琶瀧茶屋のお女将さん、さあ年の頃なら四五六のマダムという方が適当なタイプのお女将さんがやっつて来て、四人になって炬を囲んで又もや酒盛が始まった。

三時頃パラパラと来た時雨で、今日の祖父西小学校の運動会は、どうやら後残りもなく無事に皆すんだことを、女同士の二人は何回も何回も話題にした。流石秘境だ、村の小学校の運動会がこんなに話題になるとは思いながら、適当に酒の廻ったところで、土産の一つに、祖父の粉ひき唄でもと所望すると、主人とマダムは仲々名調子で

祖父のかずら橋くもゆの如く

風も吹かんのにゆらゆらと

ふかんのにふかんのに風も

風もふかんのにゆらゆらと

祖父のかずら橋ゆらゆらゆれど

主と手を引きやこわくない

手をひきや主と

主と手をひきやこわくない

祖父で名物かずらの橋と

平家美人とそばの味

美人と美人と平家

平家美人とそばの味

閑かな秋の夜にふさわしい、ゆるいテンポの粉ひき唄を、ほどよく酔うた身には得もいわず、来てよかったを二人は何回もくり返した。

又パラパラと時雨が来た、もう之以上飲めぬと、そば雑炊を食べて立ち上ると、そこに並んだ銚子の数が十七本であった。

外へ出ると時雨が上っていて、二日の月が黒々とした山の端にかかっていた。それから車で上の宿舎まで送ってもらって床について話をしてる中に、私達が句を作る人間だ

ということが主人にわかつて是非一筆残しておいて欲しいということであったが、かんじんの短冊も、色紙もないので後日送る約束で翌朝小雨の降る中を免った。

そして、勘定の時に大阪へかけた電話代の二〇七円をつけ忘れていたので、この間色紙を送る中に札状と共にに入れておいた。

送った色紙の句は

民宿の心もぬくし炬もぬくし

という民宿コマシヤルの一句であった。

大陸川柳大会一題「走資派」

走資派の胸に十字架ぶらさがり

走資派に糖衣となった毛語録

同一題「よさこいぶし」

よさこいの名手今年もまだ嫁かす

ヨサコイの上手な人で職がなし

小松園

小松園

小松園

小松園

小松園

昭和51年度 大阪文化祭川柳大会

有 信 新之助

秋晴にめぐまれた十一月七日、中之島中央公会堂三階小集會室で、第二十八回を迎えた川柳大会が、場内によく通る西田柳宏子氏の司会で、午後一時十五分から開かれた。

川柳文学の堀江としを氏の開会の辞、大阪市教育委員会のあいさつに続いて、大阪市立博物館長平山敏治郎氏が演壇に立ち、「大阪の史蹟」と題して、現在、大阪城を起点として、上町台地を南へ四天王寺まで、史蹟の顕彰碑を建てる第一期の計画が進められているが、資料の消滅してしまっている物も多く、その顕彰が困難で、市民の協力がほしいと、苦心談もまじえて、川柳にも関わりのある史蹟の紹介が、四十分を亘って行われ、深い感銘を与えられた。

休憩の後披露に移り、席題「切札」数内千代子氏選(番傘) 席題「暴力」三川美左氏選(川柳瓦版) 席題「風」伊藤静夢氏選(せんば) 席題「本音」大坂形水氏選(川柳塔) 兼題「シンボル」磯野いさむ氏選(番傘) 兼題「妻」井上淳一郎氏選(せんば) 兼題「芝」三輪喜正氏選(天主閣) 兼題「近頃のニュー」西尾葵氏選(川柳塔) 兼題「泡」永田帆船

氏選(川柳文学)の諸選者に依って、それぞれの出句数約二百余句の内から、約四十句ほど披露された。

参加者百十七名で大阪市の文化祭としては決して盛大とは云えず、顔ぶれも毎年同じようなせいもあってか、思わず会場が賑やうな秀吟を聞くことが、できなかつたようである。毎年この時期は、どこもかしこも川柳大会ばかりで、中には会場かけ持ちの参加者もあって、作句の密度が稀薄になってしまうのも止むを得ないことも知れない。

それにどの会場でも、年に一度の大会だというので、やたらと兼席題の数が多くて、二三の会場に同じ題があるといった、盛り沢山主義が、結局はお祭り騒ぎに終らせる結果になつているのかも知れない。

今年には全部の披露が終つてから、各題の特選一句、秀吟三句に、賞状と賞品の授与が行われたが、その頃には早々と引き揚げる人も多くて、会場が白けてしまったのも残念なことであつた。

最後に川柳天主閣の久保田寿界氏の閉会の辞があつて、午後四時十五分に閉会した。後で思うことだが、それぞれの方角から、

会場にきてても、そこが会場であることを示す立看板一つなく、会場に迷う人もあつたようである。入口に大きな看板を掲げて、自由に入場できる雰囲気を作っておけば、通りすがりの人でも覗きにきて、市民川柳大会の名の通りもつと会場が盛り上つたものになるのではなからうか。

特選句

別離への道切札を使いきる
 たまらなく淋しい一人の暴力団
 風の日のわかれ言葉は風に彫る
 一燈に貧者の本音秘めてある
 菊の紋召されて父は征つたまま
 妻の泣きはくろに詫ひること多し

幸せな芝が陸下の靴を待つ
 わが胸に旗出す在位五十年
 幻を抱いて唇が枯れてゆく
 雑踏の中の小さな泡になる

磯野いさむ
 高橋 夕花
 久保田寿界

NHK川柳募集

▼課題 「反省」(三句以内)

▼選者 川村 好郎

▼投句締切 12月10日(用紙ハガキ)

▼投句先 〒540 大阪市東区馬場町
 NHK近畿本部「老後をた

のしく」係

▼発表 12月26日(土)ラジオ第一

放送、朝9時15分「老後をたのしく」の時間。

借金

大路美幸選

夢でも良い五億借金して見たい
 膝緊めて借金頼む友の前
 借金で建てた傾斜の色がわら
 借金へ汗拭く真似をしてみせる
 奉納の犬へ借金させる見栄
 頭金二割新居の草を取る
 金借りに行ってお見舞置いてくる
 借金で暮し夢抱く子沢山
 借りて来た顔でへそくりはたく妻
 借金取りも貰わにゃ困る訳を持ち
 借金を追われて老を意識せず
 借金を言い出す隙が見当らず
 借金へ下げた頭が今上座
 天高しこれで借金なかりせば
 借金が平気で出来る二重あご
 税務署へ書く借金もこさえとき
 金借りた昔が一言控えさせ
 住宅ローン済むまで父さんお達者で
 昨日ならあったと体よく断られ
 子の出来をはめられ借金切り出せず

のぼる 照沖 登美也 方大 魚山 虹光 茶人 富子 洋子 通風 静泉 雅風 みのる 弘朗 木魚 近江 満津子 思月 俊風

借金も財産のうちと言うて逝き
 焼き鳥で頼む借金高が知れ
 借金の一助黙々ミシン踏む
 人情が生涯借金背負い込み
 証文を字引に頼っている借金
 借金に出掛ける妻の薄化粧
 借金をされる身分にまだなれず
 励まして金貸す血より温き友
 借金がうその上手な女房にし
 借金の重み生命をおしつぶし
 借金りに来て応接で足を組み
 夜業一つふやし借金のしかり
 ローン終えてきてこれからの茶をす
 借金にめげずロマンを磨いてる
 金借りて金で返せぬ借りが出来
 借金の終る日曆派手に操り

どんたく 踏草 白水 春日 漫柳 七面山 紫浪 照沖 掬治 実 思月 天涯 茶人 紫宏 鯛牙子 天涯

借金のないいらだちで石を蹴る
 付け馬と歩幅が揃う朝の星
 軸 優

忙わしい

青果市場忙わしい声に動く指
 忙わしくもないのに車で行く息子
 儲けてる方が忙わしそうでなし
 生き甲斐が忙わしい食事にある暮らし
 喋べるだけ喋べって忙わしい人が去に
 忙わしさを忘れ茶室の釜の音
 凡凡と忙わしい日々を食うただけ
 忙わしさを老い懲れさせぬ業にし
 店閉めて昼飯抜きを思い出し
 忙わしいが儲かりませぬ小商人
 裏方は幕間忙わしく飛び回り
 忙わしいのに上役無理を言う
 当確へ忙わしく人が出入りする
 神主の笑いとまらぬ大安日
 忙しい金鬼や仏になる師走
 弁当が五ツ忙わしい朝を出し

鐘堂 鐘堂 方大 伶人 伶人 松花 国彦 一郎 香珠夫 春日 本蔭樺 福水 無聖 里風

天正千梢選

忙しいときもきつちり愛の定期便 素身郎

熱燗で今日の忙わしきねぎらわれ 翁童

エプロンの裏も気にせず十二月 優

一生をちよこまかちよこ子沢山 みのる

救急車忙わしい暮れを突つ走る 道子

忙わしさの中の振り子がマイペース 花炎

一杯の葉書で狂うスケジュール 花炎

客寄せの品だけ売れて店が混み 洋々

失恋の悲しさ忙わしい日に埋める 天涯

招かざる客は忙わしい日にねばり 富子

外孫も来て老妻をこきつかい カズエ

忙わしい時も暇な時もある手内職 綾女

ミシン踏む足もせわしい共稼ぎ 勝一

大惨事おきて外科医の忙がしき 紫浪

台風に戦場なみの漁港内 掬治

ママ曰く此処は息抜きするところ ひろ坊

忙しい時も句帳は荷にならず ひろ坊

忙しく歯で解く細菌菌で結ぶ 照沖

何が忙しいのかバイクで飛びまわり のぼる

人

人界を離れて見れば忙わし過ぎ 古方

地

忙しい人を軟禁させているカルテ 春雄

天

根っからの世話好き忙わしき口にせず 軒太楼

軸

忙わしい起伏しあわせかみしめる

キリスト

谷垣史好選

キリストの奇蹟信じる科学の世 松花

キリストよりサンタ待つてる施設の子 一風

トラピストキリスト一人男が居 バット

御教祖はキリスト程に瘦せていず 貞祐

結婚式だけのキリスト教徒なり 双虎

キリストもよういわんわと云う懺悔 どんたく

キリストの学校野球で世に知られ 秀峰

キリストになりたし金はもうけたし 翁童

キリストの名を呼んでみる海の鳴り 潮音

ピッチャーはキリスト信者かも知れず 度

キリストも釈迦も頼れぬ年の暮 絃

十字架へ捧げた心透きとおる 白水

キリストを信じながらも職さする 昭治

十字切る姿男性寄せつけず 方大

赤ん坊の時はキリスト肥えている 弘生

キリストに今日の私を試される 道子

観光の目玉にかくれキリシタン 紫宏

キリストの愛を信じて耐えている 俊風

救われる気でキリストの絵をかける 潮音

キリストを信ず走資派かも知れぬ 酔々

十字架のような案山子が田に残り 木魚

キリストを聖書の中へ閉じこめる バット

キリストの愛に背いた罪をもつ のぼる

キリストを少し疑う曲り角 肖二

キリストの無力善人泣いている 洋々

現代の十字架キリストだけで無し 保夫

キリストを信じ爪など染めはせぬ 登美也

佳

虚像でもよいネオンのクリスマス 優

キリストを信じ不幸の絶えぬ女 伶人

キリストが背負い残した罪もあり 国彦

復活をして五百羅漢の中にいる 酔々

多情なる女をキリスト持て余し 洋々

人

十字架の胸で嫉妬が燃えている 本蔭棒

復活の夜も鼻は起きていた 酔々

十字架の愛よポプラも天を指す 照沖

天

十字架の光は偽善かもしれぬ

軸

新しい70枚綴が出来ました

川柳塔柳箋

一冊百五十円 送料二百円

初歩教室

題 — 「友」 —

本田恵二朗

自己を表現するということの手段として、われわれ川柳人は、川柳という短文芸を活用して、その効果を挙げてゐる。書道、絵画、花道、茶道、其他もろもろの道でそれぞれ自己表現に努力し、心を打ち込んでおられると同様に、川柳を介して自己表現をするべく、互に励んでいるわけだが、人間性をより高めることによつて、自己表現の内容が豊かになり、円熟してくるのだと私は思っている。

そう思つてはいるもの、その成果は、言うは易く、行ふは難きものだと、いつも痛感している。つまり川柳に卒業はないと言われるのはこのことかと思つたりしている。

ともあれ、それぞれの人生にプラスする川柳であらねばなるまいと思う。

友のない孤独悪から這い出せず
戦友は十八の顔で笑つてゐる

正則

(戦友の紅顔額の中で笑む)
悪友の誘いうしろに妻の耳

同

(悪友の目くばせ妻の目と出合い)
友の愚痴黙つて受けるコップ酒

幸

友情を越えた干渉もて余す

同

寄せ書の友の字温い鞭となり

同

(友情の寄せ書鞭の音がする)

同

友情に限度があつた大海日

俊

友のない悩み鳴に打ち明ける

同

ピエロにもなれて友情角がとれ

同

(友なればこそピエロにもなつてくれ)

同

友情を温めおうた二日酔

静

親友がライバル互に励み合う

同

(ライバルにしおうて励みおうて友)

同

癒え近い友の雄弁天高し

露

(癒え近い友よく喋りよく喋り)

同

緊急へ飲み友達に役に立ち

同

(どたん場を飲み友達に助けられ)

同

敬老の日に去年の友が見つからず

同

明治同志井戸端会議思い出し

同

(井戸端会議明治の友となつかしみ)

同

久しぶり竹馬の孫と孫を読み

同

(久方の竹馬と孫の数くらべ)

同

年毎に細る気もする友が減り

同

(年毎に友が減るなり冬木立)

同

良き友にめぐまれ伸びて行く我が子

同

(良友にめぐまれすくすく伸びる吾子)

同

顔色が悪いと友は見逃がさず

同

(顔色の悪さを友は見逃がさず)

同

妻の友亭主の愚痴を棄てにくる

同

親友にズバリ天狗の鼻折られ

同

(天狗鼻折つて折られて長い友)

同

あのときの冷き友情だと悟り
友情を棄せて絵葉書の旅だより

翁

(旅空から友の便りが降つて来た)

同

友の計を知らず便りが雨にぬれ

同

(友の計報涙の雨に濡れてぬれ)

同

どちらかを悪友に話し話つて

同

どん底の暮しへ友の温い手

同

(どん底のあがきへ友の手が温い)

同

どん底の心に友情ジーンとしみ

同

逆境に一緒に泣いてくれる友

同

(逆境へ涙をくれる友を持ち)

同

酔うたふりで友の心を測つてる

同

無口でも友に気持ち分らせる

同

(無口だが友には気持ち解らせる)

同

友亡くなり古里遠くになりました

同

(亡き友が古里遠いものにする)

同

友の前みえを張つてさみしくなり

同

雀友と肩を叩かれ借りがある

同

(借りのある雀友めに肩叩かれる)

同

新家庭悪友のレター妻難解

同

(新妻へ悪友のレター妻難解)

同

相あわれむ親友も同じで出世せず

同

(仲良しの俺もお前も出世せず)

同

境遇もそっくり気が合う友である

同

裕福になりて音信たえし友

同

(裕福になつたか音信たえした友)

同

真実に触れて無口な友である

同

(口下手の友真実に触れてくれ)

同

ふるさとに着くや一途に友を訪い

同

問いかけて言葉くれぬが花は友

同

(もの言わぬ花を心の友にして)
友情を測るものさし見当らず
お金を買えぬ友情ありがたし
(お金では買えぬ友情温める)

同 昭 治

悪友が逝って何かしら拍子抜け
(悪友が逝って人生拍子抜け)
友人と問答しようか耐えようか
出世した友に瘦肩叩かれる
友引をドライブアイスに寝かされる

同 静 子

戦友が鶏さげて飲みに来た
(戦友はうれし鶏さげてくる)
お盆月決って友の顔浮ぶ
(盆来れば亡友の顔雲に浮く)

同 無 人

娘の自慢親馬鹿承知で友に売り
同 頼 次

遠ざかる軍靴もいまは懐しく 小松園

ああ静観堂大人

菊 沢 小 松 園

季賛、十止庵、茗人、水車、静観堂と古い
柳人が近頃続いて亡くなって行く、淋しい身
にも心にも沁み入る秋になった。川柳雑誌以
来の柳歴の古い人々ばかりだ。殊に最近逝か
れた小川静観堂氏は一風変わった柳歴の持ち主
で、川雑時代は不朽洞会員として陸軍大佐の
堂々たるもので、戦時中の華やかな軍人は我
々庶民の遙かな存在で普通なればなかなか特
殊な近づきがなければ言葉も交えられぬもの
だった。けれども川柳のお陰で親しく御話も

(娘の自慢親馬鹿振りて友に売り)
肚割って話せる友に金がない
生涯の友は死線を越えた仲
親友だからこそ言える嘘があり
とりあえず飲み仲間だと逃げておき
頑張って来いとハネムーン送る友
探る目がチラチラ女のクラス会
悪友に尻叩かれて恋進む
悪友の祝辞きわどいと口に触れ
先見ええから禁煙咄う友
色褪せた友一人減り二人逝き
どん底で友の好意をさげている
友達は皆んな建てたという便り
友の家縁で結んだ旅プラン

同 慶 彦

同 漫 柳

同 柳 五郎

同 利 美
同 貞 祐

当時でも出来たし戯談も言えた。到底勲三等
の堅さや厳しさは窺えなかった。
豊中の句会で御目に掛けてた頃はすでに街
医者としての静かな人間静観堂であり、一個
の柳人として角の取れた円満な人格は好々爺
の柔和そのものの面影であった。
会えばいつも自宅へ遊びに来てくれと言っ
て居られ、私もそのつもりで居たが終にそれ
は出来ずに終ったことが今更残念に思っ居
る。

大陸に居られた頃、日本に帰られたある時
丁度旬会に当たった日に任地である張家口陸
軍病院長当時であると記憶しているが、その
頃の川柳雑誌社の本社旬会は御津八幡宮の本
社参集所であったが、軍服の正装に副官隨え
て長い軍刀を左手に鷲つかみにして来られた

友人が商売仇につとめてる
若鮎の友を信じた日の無念
悪友の祝辞錦上華を添え
友情の玉を真球にまで育て
クラス会ニックネームで若返り
名を聞いて肩叩き会う同窓会
紅顔の面影たどるクラス会
戦いの労苦に花咲く戦友会
暮の友は負けた口惜しさもう忘れ

同 健 二
同 同 同
同 同 同

同 江 水

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

大萬川柳

「手応え」

入選発表

選者 川村好郎
投句総数 四百八十句
入選 四十七句

銀行を出る手応えあった歩巾

八尾 鬼遊

中年の恋手応えを金で待ち

今治 宵明

手応えを試す小石だ投げてみる

大阪 好一

手応えがあつて止めの矢をつがえ

大阪 弘生

手応えは日記の中にかくれてた

八尾 弥生

手応えを舞台の袖でたしかめる

松原 史好

まずお茶に誘つて手応え打診する

大阪 智子

手応えの一つ一つを踏む試練

岡山 白水

手応えない糸を見つめて日が昏れる

橋本 恒治

手応えがありと店員つきまとい

大阪 玉子

ウインクで手応えあつたとうぬぼ

れる
大阪 炳齋

ぼろくそに云つて手応え期待する

大阪 千子

彼の手がにぎり返してぐる温み

東予 悠泉

手応えがないので酒に切り替える

尾鷲 伊津志

期待したほどに手応えない焦り

大田 軒太楼

手応えない聞き込みの靴が禿び

鳥取 日満

手応えの拍手へやたら水を飲み

西宮 多久志

手応えのあかし黒幕動きたし

平田 代仕男

手応えを待つてる歳暮と見てくれ

和歌山 与史

手応えへさぐりを入れてくる電話

和歌山 幸

もう一度緩め手応え確める

手土産の反応奥に招じられ

鳥取 露杖
手応えが欲しく裏口の門叩く
母になる手応え胎動を聞く

大阪 道子
手応えへ次の布石を考える
手応えへすこし気張つた袖の下

倉敷 里風
取るものは取つて手応え更になし
やすやすと手応え見せぬ当てがあら

橋本 木魚
手応えは十分ゆつくり受話器置く
手応えと錯覚をした片えくぼ

倉敷 素身郎
蔭で糸引いて手応え待っている
手応えを竿に残して糸が切れ

倉敷 筒子
押して押して手応え待つ自信
待つていた手応えひじ鉄でかえり

大阪 あいき
手応えない履歴書を今日も書く
ながし目に男は弱いものど知り

堺 憲祐
手応えを探り直球を投げてみる

住 句
手応えはとどかぬ距離で振る反旗

富田 花梢
我が道を行くに手応えなどいらぬ

大阪 好一
手応えは上々ばら色の夜が更ける

営業店
阿倍野店
堺吉店
住野店
平島店
都福店
今三店
九条店
八尾店

credit system

丸越



本社 大阪市阿倍野筋3-15-1
TEL 632-3806・3807

月賦百貨店

宝塚 静馬
手応えない横顔のうつくしき

大阪 智子
山彦なら好きと応えとくれるのに

大阪 あいき
亡母呼べど手応えもなし秋の雲

西宮 多久志
人ノ句
手応えの無きがつのらす恋心

大阪 ますえ
地ノ句
手応えがあると無かろと招き猫

大阪 玉子
天ノ句
先ず努力その手応えを信じ切り

選者吟 大洲 曉明
 働ける喜び手応え考えず
 昭和五十一年度

ベストテン (十月現在)
 一 美幸 二五〇八尾
 二 鬼遊 一八〇八尾
 三 花梢 一七五富田林
 四 好一 一六五大阪
 五 百酒 一五五西宮

六 牧人 一五〇神戸
 七 あいき 一四五大阪
 八 一二三 一四五堺
 九 多志 一四〇西宮
 一〇 智子 一四〇大阪
 一一 洋々 一四〇鳥取
 一二 夕花 一三五八尾
 一三 静馬 一三〇宝塚
 一四 筒子 一三〇倉敷
 一五 憲祐 一三〇堺

一三〇 和歌山
 一三〇 鳥取
 一三〇 堺
 一五 倉敷
 一〇 寝屋川
 一〇 藤井寺
 一〇 今治
 一〇 五 和歌山
 一〇 五 大阪

昭和五十二年度第一回
 「つつく」五句以内
 締切 十二月二十五日
 第二回
 「予告」五句以内
 締切 一月二十五日

以下略 583 堺市堀上緑町一三三十七
 藤井一二三方 大萬川柳係

大萬川柳会の会則

- 一、本会は川柳に興味を持たれる全国の同好者ならどなたでも投句出来ます。
- 一、毎月の出題並びに選は川村好郎が担当し投句は一人五句以内、用紙はハガキ。
- 投句は係りが到着順に一句毎に句箋に清記し、無記名のまま一連番号を付記し、順序混ぜかえて選者に渡し、選句をします。
- 一、毎月二十五日締切、入選発表及び出題は毎月の川柳塔誌上に掲載されます。
- 一、左記の採点法により月々の得点を加算し順位を定め、毎月のベストテンを発表します。同点の場合はその月の投句先着順とします。天位四点、地位三点、人位二点、佳句一、五点、平抜き一点。
- 一、毎年十二月締切分から翌十一月締切分までを一年度として、年度間の総合点の成績により順位を定め、年度ベストテン把持者に賞品を贈呈し、大会の選者に推し、懇親宴に招待します。なおベストテン第一位に

は特に梅里賞をもって表彰する。
 一、本会の大会は毎年二月に開催します。本会の会費及び投句料は不要。但し大会の会費等は別に定める。
 一、投句その他の連絡先は大萬川柳係へ。

★ 川柳塔社常任理事会 (11月4日)

11月7日は大阪文化祭川柳大会(本年は川柳塔社が当番)である。かつては川柳雜誌社と番傘川柳社が火花を散らすようなはげしきで当番を分け合ったものである。
 52年5月号で六百号記念になることは何度も書いたが、五月八日(日)午後一時から、「旅人」と、その後の路郎作品の普及版刊行(平共千円の予定)と路郎先生の13回忌を兼ねた大会にすることに決定。会場は以前から句会部が選定中だが次号には発表が出来るようである。
 西尾榮氏を大会委員長に推薦。52年5月8日(日)をメモしていただきますように。

PRの欄

「川柳に笑いとユーモアをたっぷり」との運動展開中です。
 家計簿に億という数字書いてみる 照沖
 何んとなく賄路のつもりお賽銭 ひろ坊
 正確な時計で息がつまりそう 度
 スト解除空気がうまいものを知る 双虎
 はっきり寺八月休みと書いてある日々子
 (伊丹市・ゆうもあ川柳会)

柳界展望

(原稿締切毎月末)

から一〒658神戸市東灘区深江北町2丁目11-17。光森良方。

▼弓削川柳社発行「川柳紋土」10月号は第28回西日本川柳大会報。台風17号の苦勞話を浜野奇童会長(岡山県同人)が巻頭に書いておられる。

▼岸和田川柳会(高橋操子会長)発行の「さしせん」第26回岸和田市民川柳大会号

▼川柳しなの四〇〇号記念展が10月22日、24日松本市百趣二階で開催。表紙絵：口絵・挿絵から川柳関係では食満南北(水墨)前田五健(版画)など。江戸時代の松本に於ける川柳環境とその周辺(「田舎梅」)狂歌水寫集「ほか」好評だった。

▼川柳はこたて11月号に、書評「葵水」遺句集を泉きよし氏がページを使って紹介。以前北川春葉句集「聴診器」や、不二田一三夫著「川柳寄席」が、川柳さつばろ。に紹介されたことがある。

▼第六回青森県川柳年度受賞作は「死ぬ時の広さをおう寝台車」はか七篇の小山吉朗氏。

▼備北新聞10月10日版に大坂形水選「音」が紹介されている。一雑音を片方の耳は気にして一好郎。ほか

▼白砂旋風氏(ホノルル)から「私は最高級の日本語を習いましたが使用しませんので誤字を書く時があります。(三)、四枚のハワイ短信をお寄せください)

▼同人の動向▲

▼若本多久志氏(西宮市)の句集「老の坂」から、10月26・27日の両日、朝日放送の朝7時15分中村鋭一氏送の時間に川柳が紹介され大きな感銘を与えられた。なお相変わらず旅行をたのしまれ松山から石鎚山の秋を探り、11月3日の高野山での葵水忌に選者として出席、翌4日は当地の石仏巡礼をされた。

▼尼縁之助氏(出雲市)から「平田市の久家代住男氏のキモ入りで川柳会が発足した平田青年グループの指導にも走り回っています」

▼西田柳宏子氏(大阪市)から「10月24日に生駒の霞乃先生を訪ね、路郎先生と岡橋宣介氏の対談カセットを聞いていただき、持参したテープをプレゼントしてきました」と。

▼八木摩太郎氏(堺市)から「堺まつり協賛川柳大会は大成功でした。朝日新聞社寄贈のパンフレットに私の句碑の写真が掲載。また同社東京班の取材に各所を案内し、それが五日間連載されました。なお堺カルタの審査を頼まれ川柳の選より苦勞しました」と。

▼小西無鬼氏(兵庫県)から10月13日夕刻、呼吸困難のため主治医のすすめにより国立篠山病院に入院しましたが経過は良好です。そんなわけで正月も帰宅できそうになく年賀も欠礼しそうですと。

▼仲どんたく氏(神戸市)が所属する青樹社展が11月16日、21日まで心齋橋のカワチ画廊で開催、連日盛況

▼藤井明朗氏(鳥根県)から「現在月三カ所の句会をもっておりですが、川柳塔の会員をふやすべく努力しています」

▼傍島静馬氏(宝塚市)から「10月ごろ健康自慢の私が10月初めごろから腰を痛め寝たり起きたりしています。が、本社句会の連続出席だけはなんとか守りたいと思っております」

▼河村日満氏(鳥取市)から「かねてから大秦の映画村へ一度行きたいと思っていただけ、美幸さんから八尾市民川柳大会の案内をうけ、病妻から許可が出たのでぜひ見学したいと考えています」

▼正本水客氏(大坂市)と黒川紫香氏(尼崎市)は東北旅行十一泊というスケジュールを組み10月15日から青森竜飛岬を振り出しに紅葉を追っておられる。

▼八木摩太郎・徳子夫妻の金婚祝賀川柳会が11月11日に同氏居で開かれた。

▼中島生々庵主幹は相変らず公私多忙だが健康管理には十二分の用心をされてい

▼野口北羊氏(岐阜川柳社・柳宴主幹)の句碑が52年3月に建つ。場所は岐阜市長良古津古津苑内。碑句は「鮎うまし長良の水は澄みに澄み―北羊」募金一口千円(何口でも可)締切は52年2月10日、送金先〒500岐阜市雲雀町三丁目―田中明二。

▼東野大八氏(美濃加茂市)は柳宴11月号に夢詩朗句碑建立式に参加して一を執筆。碑句は「ふるさとおもう真ごころ此処に」とめ

▼夢詩朗(九州小倉・平尾台の頂上に建立)なお同氏編集による「むしろうの本」出口夢詩朗氏の本が出た。

▼ふあうすと川柳社編集室移転。交換誌なども一月号

どこにもない味

宝島の王様

HIROTA

▼青山慶之助氏(堺市)から9月29日朝、長女雅子が生まれ、どうやら私も人の父親になりました。おめでとうございます。

うもあ川柳会々々長)は、新年号の。ゆうもあ特集に感謝しますと編集部へ金一封。お礼申しあげます。

▼訂正▲

▼有信新之助氏(大阪府)から川柳を忘れたわけではありませんが、山に魅入られ休日には山々へ踏み入っております。白山につづいで大山を高望みしました。膝をやらせてしまいました。途中から見て推理に追いつく箸が止む。新之助。隠岐不酔氏(姫路市)は編集部へお茶代として金一封。お礼申しあげます。

▼前号P12山川阿茶さんの二行目は「下駄箱にフランスポイタリ・スイス靴」と訂正。

▼前号P18弘津柳慶氏の一行目は「年金の足しの務めだ愚痴るまい」と訂正。

▼榎谷漫柳氏(伊丹市・ゆ

▼旅信▲

▼西いわを氏(藤井寺市)から伊豆長岡温泉へ来ています。車窓で富士の嶺が見られました。

▼阿萬萬的氏(泉佐野市)から「信濃路の雨の旅をつけています。路郎先生の日なり」そのままで。土に生き雪に耐えぬく人の知恵「萬的」。

▼黒川紫香氏(尼崎市)から「水客、紫香の二青年が東北へ来ています。おと

き嘶のように赤が成る「水客。一ひたひたとみちのく秋の色で抜け」紫香。

▼川柳わかやま主催の高野山での焚水意、没句会(11月2日)から寄せ書き拝受

▼香川の三井酔夢さんほか大阪・奈良・兵庫の柳人が48名出席された。

▼12月の句会▲

▼菜の花句会は10日6時から西郷会館(八尾神社境内)で開催。一題「反省・悟る・忙しい・差入れ。席題二題」投句は美幸宛。席題

▼南大阪川柳会は20日6時から松崎町三丁目の大萬で開催。題「知識・リスト・居職・譜」。

▼川柳東大阪句会は18日6時から東大阪市立中央公民館二階第二集會室で開催。題「背広・屋根・しぼる・ボナス。席題二題」。

▼故森田茗人氏(鳥取市・参事)の追悼句会が11月21日同市で開催。選者として

栗氏ほか小松園・薫風・雀踊子・弘生・岳人諸氏ほか

中島生々庵 共著
中島小石

生々庵

頒価 三千元 (送料二百円)

川柳塔社

同人句集

価送 1,500
200

川柳塔社

同人バッジ

価 (送料共) 1,100

バックナンバー

お問合わせください

永尾英断遺句集

「遍路」

B6版
三二六頁
頒価 千円
(送料共)

序文・正本水客ほか

小西無鬼・植村客遊子諸氏執筆
作品「遍路・生活・酒・旅・仏」三三二句

申込み先 550 大阪市北区牛丸町公有地

国鉄 梅田貨車区

中尾 飛鳥

葛城伊三郎氏逝く



福浦勝晴

昭和五十一年十月三日午前七時十分頃——本社同人葛城伊三郎氏がかねて入院加療中の岸和田市立病院で、哀しくも六十九歳を一期に突然忽えんとして不帰の客になられた。死因は心不全による突発的な心臓発作。

戒名 秋覚慈光信士

よって葬儀は翌々五日、同市春木本町「西性寺」に於て午前十一〜十二時、親族始め生前の氏の功德を称える多くの町内人、市関係者、川柳では特に本社から代表者、地元岸和田川柳会の連中等参列してしめやかな裡にも盛大に営まれた。

氏は和泉市横山町の出身、早くから岸和田市春木泉町に居住して男子用学生服を主にした洋品雑貨商「かつらぎ商店」を経営、市井の好々爺で、私とは同町内の関係でこ懇意に願っていたが、特に川柳を通じての親密の度

合いには並々ならぬものがあつた。

性格は温厚篤実、つとに本業の傍ら岸和田市民生委員、町内副会長、弥栄神社委員等兼任、その他——同町内のためにもろもろ尽力された町の功勞者である。心の芯の強い反面、驕らず高振らず頭の低い人で、学歴は旧小しか出ていないというのに特に書道に秀で、文学的素養にも恵まれた努力家だつた。

川柳を始めたのは昭和二十六、七年、私より三年ほど後だが、当初から高橋操子さん主宰の岸和田川柳会で研鑽を積み、のちに操子さんのすすめて川柳塔社同人に参加。多忙な本業や公務のかたわら趣味として川柳一途に生きた潔癖の人である。不肖、私にとっては処世の大先輩であると共にこよなき柳友、酒友でもあつた。

川柳塔社、きしせんの句会等にはいつも欠かさず出席、出席率のよい点では川柳塔社から過去いくたびか表彰状をもらつている。また社会人としては協調性に富み、時に大阪ドブ池筋で仕入れた本業の大フロシキ包みを句会場の目に見えぬ片隅に置きながら控え目に末席で作句に専念していた謙讓な氏の姿が、今も尚私の眼にチラチラとちらつく。

「福浦さんで、川柳でなかなかオモロイもんなやなあ。ワイもひとつ、やつてみたらかとおもて。こんななどないやろか？」その句はすでに忘れてしまつたが、氏がそういつて私に語りかけたのはもう二十年以上も前の話。雅号はてれ臭いといつて最後まで本姓の葛城で押し通した。

それからは仕事の合い間に川柳、川柳で、川柳が働く人の詩なら、氏はそれを地で行きながら川柳に生き甲斐を見つけた中の一人だつた。それを実証するように近年川柳塔の近詠にも佳句が採り上げられ、どこの句会でもよく抜けていた。そして句会の帰りにはいつもどちらから誘うともなくそのへんのちよつとした飲み屋で一パイ飲みながら、川柳を語り人生を論じた間柄だつた。

その葛城氏が心臓の異状を訴えはじめたのは一年位前である。むろろ市立病院で専門の医師に診てもらつていたが、夜中に時々心臓がとまつてしまふような発作に襲われるので医師の忠告を忠実に守つて近年禁酒していたそういう私も実はその四年前に冠不全(狭心症)に悩まされ、そのときは氏からたびたび病状を聞きわられたが、こんどは私が氏に禁酒をすすめる役廻りとなつた。しかし、心不全が結局氏の終焉につながるのでは。まだ入院されて間がなかつたので、訃報を聞いた瞬間、私はボー然自失、わが耳を疑つた。

辛い気丈な奥様も健在なので後顧の憂いはないとしても、氏の死去は私にとつて確かに大きい一つのショックだつた。

茲に改めて御氣の毒なご遺族の方たちに心から成る弔意を表すると共に、故人のご冥福を祈つて拙文を擲筆します。

弔吟

名物の裸踊りもいまはなし

合掌

勝晴

本社十一月句会

会場 金属会馆

八日 午後六時

昨七日が大坂文化祭川柳大会。そして今日が川柳塔社の句会、二日つづきである。よく好きではないと出席できない秋の川柳シーズンである。

11月句会ともなれば、本年度の全出席者もあと一と月とあって今さら休めない。楽しいなかにも難行苦行というのが本音であろうか。

倉吉市から「倉吉打吹川柳会」会長奥谷弘朗氏が本社訪問後、句会に出席され拍手渦巻く中で紹介された。

披露にはいる前、岸和田川柳会の人気男、故葛城伊三郎氏の冥福を祈って一分間の黙禱をささげた。

戸田古方氏の柳話は来年百年祭になる西郷隆盛の「命もいらぬ名もいらぬ」と題して、悲劇の英傑を語られた。(スペースがあれば本誌へ掲載)この大南洲の無欲そのままの情熱で川柳に一生をささげた路郎先生を若い人たちに再認識させるべく熱弁をふるわれた。月間賞杯は小出智子さんがやいた。

(進行・西田柳宏子―記録・高杉志遊)
出席―古方・与呂志・雅風・多久之・静馬・美幸・蘭・水客・潮花・紫香・太茂津・与

史・幸・一三夫・漫柳・滋雀・肖二・綾女・
重人・薰風・柳宏子・花梢・以兆・眉水・誓
二・いわく・飄太・柳晴・寿美子・喜風・敏
・栗・醉升・幸太郎・柳志・とし子・維久子
・庸佑・醉々・千万里・生々庵・牧人・頂留
小松園・形水・鎮彦・雀踊子・儀一・夕花
凡九郎・川狂子・文秋・智子・君子・三十四
・舟・度・弥生・亜成・岳人・好郎・葉子

席題「醉」

久保田以兆選

口につばはわくほど強く酔が匂う
酔にされるらしいと蛸も知っている
酔の匂いさせて高下駄いらつしやい
母の味 たつぷり見えて五目寿司
醉のものを入れてとこのう妻の膳
足早い豆腐が酔ったばくった今朝
醉の瓶がお酒に見えてしかなかなし
菊鱈 醉が利きすぎた蜜の顔
甘酔っぱい恋には罌が仕掛けられ
青空りは見えて来たので寿司を巻き
お隣りは鍋物らしいポン酔買
CMのぼん酔に母の味がない
ひと匙の酔に江戸前ができてくる
酔につけてやらない夏蜜柑
見ただけでさぞ酔いたいよう夏蜜柑
一滴の酔加減 見事母の味
家毎に酔を買っている秋祭り
テキストの通りの酔加減 氣に入らず
水虫の悩みは試した酔にもつけ
三杯酔 盃を重ねた松葉ガニ
のり巻の酔の香に子供ら寝付かれず
帰郷して蛸酔の味を噛みしめる
だんらんのはん酔にしみる秋を酌む
醉かげんはやっぱり年寄りものを言う

雀踊子 鬼遊 敏
小松園 川狂子 智子
幸太郎 一三夫 柳志
滋雀 肖二 維久子
多久之 久保田以兆選
蘭 静馬 水客
美幸 静水 眉水
静馬 水客 眉水
滋雀 肖二 維久子
多久之 久保田以兆選
蘭 静馬 水客
美幸 静水 眉水

蜜柑の酔指にしみこむ荒れた指
ほつといて酔にして使う下戸の知恵
醉加げんに母の手料理生きている
家毎にすしの香が理する村祭り
もてなしの焼松茸へしほる柚
ハネムーン 済んで酔のもの早過ぎる
二杯酔にてつちりの味ひきしめる
夏みかんひとつ確かな愛を知る
一つまみ塩が勝つてる寿司の味
ええ顔の孫は酔っぱい口をする
蜜柑むいて酔いはみんな妻にやる
常連の舌を知ってる三杯酔

席題「蜜」

大路 美幸選

ドン底で逢った他人に蜜貰う
選挙戦べとつく蜜を売りに来る
良心が疼いて妻子へ蜜を買う
智子 薰風
与史

* ATLAS *

Plus

高級洋菓子・レストラン
本店 洋菓子部 TEL (21)2334
レストラン TEL (33)9974

蜜なめた日から十字架負う少女
 蜜の列車蜜蜂乗せたとよう
 蜜壺を抱いて女に賭がある
 ハチミツの見舞い並べて病み続け
 蜜の仲そろそろさめてきた朝餉
 箱庭の花も蜜蜂見逃がさず
 蜜を吸う蜂をいつまで友とさす
 蜜蜂のある日たかつかおとなる
 花道の蜜苦味かろう筈はない
 今日開く花を蜜蜂知って来る
 蜜の色とろける匂いと嘘の味
 我を折って蜜あるこへ来てしま
 蜜抱いて蝶のつぶやき聞く花芯
 伴せぬ夫婦で蜜を溜めている
 蜜の甘さへ男泥舟漕いでいる
 アベックで蜜を探している河童
 蜂蜜のながさも知った窓の罅
 掛取りのように蜜蜂飛び廻り
 花の蜜人は集り人は去る
 べてん師の言葉に蜜が塗ってある
 油断した蟻蜂蜜で溺れ死に
 蜜慕う蝶は花芯に身を沈めず
 一滴の蜜の甘さがすてきれぬ
 蜂蜜にあっては花の香を残し
 風見鶏蜜の匂いはすぐわかる
 一しずくの蜜満ちて一年草
 老夫婦わずかな蜜を温めあい
 花の蜜蝶は静かに羽根を閉じ
 喪服を着るおんなに明日の蜜がない

兼題「市民」

本多 柳志運

市政にはうとい市民で旅馴れる
 編入の市民へ行政冷た過ぎ
 暴力へ声のつづてを打つ市民
 車座に市長を囲む市民権

柳 信
三 優
軒太楼

市民には笑顔で話す市長にて
 当選をすれば市民に砂をかけ
 小市民肩寄せ合せて星を読み
 広島市民の怨念消えぬ原爆忌
 投票欄市民の声が怒っている
 毒舌の投書自由業という市民
 一市民の声が政治の色となる
 わが主張を市民の声にして抗議
 税務署が場末の市民を寒く抗議
 辞めてからどつきりかかる市民税
 市民税ワレ納めとるかエーわれ
 市民税も納めぬ人で街が混み
 午前二時オギアと市民一人殖え
 露地裏に声かけ合うて小市民
 市史読んでそれから市民らしくなり
 無視されて市民値上げのバスに乗る
 市民とは名のみスラム街の隅で生き
 市民権持ってドヤって生きてます
 予算案市民の権利主張する
 リコール署名市長あっさり首となり
 御堂筋の銀杏に秋を知る市民
 一市民速き戦史の中に棲む
 窓口でまた叱られる一市民
 市の花もマークも知らぬ市民です
 善良な市民に緑の知らないベンチ
 善良な市民に赤い羽根がすき
 市民権オレにもあると釜ヶ崎
 市民の顔みんなが票に見えてくる
 一票を市民にさげぶ披露器
 お祭りの好きな市民で燃えて
 老人証出して市民の顔で降り
 大阪の市民に残ると根性
 肩書もとれて気らくな一市民

維久子
一三夫
鎮彦
三十四
君雀
滋月
祥栄
一
九
月

秋田 實主宰・不田一三夫編集
 漫才 第4号 74ページ
 定価三百円千二百円
 〒544 大阪市生野区勝山南1の14の17
 漫才作家くらぶ

街路樹の秋が市民の肩に散り
 正直な市民を酔わす酒がない
 内縁の妻で市民にまだなれず
 市民立ちあがればサツも腰をあげ

忠三
登美也
古方
弘生
いわを
花小松園
岳松園
君松園
生々庵
生々庵
薫風
滋雀
雀子
眉水好
醉花
夕花
夕花
夕花
高台に移って家計狂いだす
高台に住んでブライドなどもたぬ

高台へ世間話がとどかない
 高台におもちやのような家が建ち
 ふるさとの高台恋が埋めてある
 見上げれば高台構図になりそう
 高台に住んでふくらみはぎ太る
 高台に学校が建ち昼の鐘
 高台の暮しに染まる風の彩
 高台で夜明けの早い家に住み
 見晴らしよいと高台に墓地を購う
 高台が気兼ねして干す赤いもの
 高台に住み今日も逢う造地車
 高台に高台がある 造成地
 高台の窓もロインの住み心地
 高台へ朝を配る息づかい
 高台の家にも油虫がいる
 高台に立つと勇気がわいてくる
 高台の養老院に星が降る
 高台の外人墓地に孤獨
 高台に移って家計狂いだす
 高台に住んでブライドなどもたぬ

柳 志運
小浜 牧人選

高台の家空氣がうまい茶がうまい
 高台の犬下ばかり見て吠える
 高台に登る近道見付からず
 高台に住んで世間見付からず
 高台へ庶民の顔を拭いて住み
 高台で近所の噂気にして
 高台に住んだは父の父の代
 高台の売家夜景も父の父の代
 人生の高台にもある落し穴
 下町の情け高台から眺め
 高台の窓に生活を見下げられ
 高台は心静める空がある
 高台の家におかしな犬がいる
 高台の子供人には近寄りぬ
 高台に昔語りが埋めてある
 高台と騒がせて建つラブホテル

兼題「はかどる」 黒川 紫香蓮

口ずさむリズムがミシンはかどらせ
 音楽を聞き宿題をはかどらせ
 まず腹を満たしはかどる大掃除
 裏金の効め工事の先も見え
 毛筆で書けば賀状のはかどらせ
 はかどった仕事へ待つるコップ酒
 大安の新郎 新婦 量産 産す
 柳一本道路工事がはかどらせ
 はかどった畠の土が白くなる
 はかどらぬ仕事ばかりを押しつけて
 はかどった分だけ貼ったサロンプラス
 ロッキードの解明灰色まではかどらせ
 吸殻をためて原稿はかどらせ
 はかどらぬ工事へ雨が又続き
 捨てること好きな祖母が又続き
 はかどった工事手抜きが気にかかり
 はかどった仕事の後の酒の味

眉人 岳柳 漫柳 弘生 蕪風 無聖 鬼遊 維雀 滋雀 重人 形水 人雀 牧人 登美也 軒太楼 一栄 与史 生々 醉々 潮花 柳宏子 静馬 幸太郎 醉舟 吸江

その愛が不精な筆をはかどらせ
 道一つへだてただけではかどらせ
 手伝いが多く編集はかどらせ
 すらすらと事が運集はかどらせ
 秋の夜の盃ばかりはかどらせ
 里帰りの娘が来てはかどらせ
 はかどらぬもの役所の道普請
 テキサパキと母眼立たない動きさ
 はかどらぬ病気に医者を変えようか
 はかどらぬ話へ二本目酌けさせる
 値ざつたらぬきめん仕事はかどらせ
 稲刈機はかどる音で秋深し
 午前二時はかどりだした原稿紙
 はかどっているなと思ふ機音
 縁談はかどりすぎるのも不安
 積木くずして男の思案はかどらせ
 プルドゥーザー来てあつて終わり
 古日記出て来て掃除はかどらせ
 はかどらぬ話に膳の音をさせ

兼題「縞」 正本 水客選

妻揚子吹けば人射る縞がっば
 めくら縞亡母が二十才で着たそう
 縞の財布今夜は三島泊りなり
 若き頃の祖母アルバムに地味な縞
 阪神はスカッと勝つ縞のユニホーム
 善良な縞馬に囚人服を着せる
 ジャケットの縞が手なれたバスボート
 秋晴れに陛下も縞の背広召し
 型紙がうごけば縞が走り出す
 目くら縞亡母が四十の柄であり
 ゼブラゾーン渡る私に赤が待つ
 縞馬の縞神様は変えようと思はず
 ストライプですかと店員いい直し
 縞のシャツ着てもピエロになれませぬ

維久子 与呂志 静形馬 史好女 水菜 眉水客 小松園 儀一人 重遊花 史好客 庸生香 弘香

濡れ椽へすだれが作る縞模様
 才女今日縞の和服でペン持たず
 堅縞が似合うと夫も言うわす
 隠坊の寝酒へうるさくなる縞蚊
 縞馬に乗りたし縞のジャケット
 縞メノ石の年輪かきと思ふ
 横縞の岩に北風輪かきと思ふ
 縞柄が似合う背筋をシャーンと立
 牡丹刷毛たたく楽屋着子持縞
 取りの草履に似合う格子縞
 縞馬がさげすむ虎の乱れ縞
 縞柄のスーツ昭和のお洒落な
 耕して天まで屈く縞模様
 鷹治郎が着ると絵になる格子縞
 上品な無地に見えるめくら縞
 木綿縞母の温かみか織つてある
 めくら縞女の線をひた隠くす
 縞模様さえ鮮やか縞馬の子が生れ
 何処までも平行線だから縞で
 縞横様生れぬまで縞を着る
 縞横様牡蠣の筏が夕映える

潮生花 弥舟 雀庵 史好 弘生 紫香 眉水 潮花 蕭風 肖二 一三夫 古方 夕花 飄太郎 幸太郎 智客

初心者歓迎
 (規則書呈上)
 天勝に酔いし
 幼き日の記憶 (どんたく)
 大阪市南区大宝寺中之町一
 誓得寺内
関西奇術教室
 TEL (21) 七二二八

老地物壇

▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

京都塔の会

松川杜的報

きのうより更に深いと思う空
うなされて深い処へ落ちる夢
雨残る杉の鞍馬で秋をさく
指の節ばさばき鳴らさず
不甲斐ない青春だった古日記
西陣の伝統守る指のわざ
太い指が霧のガラスに別れ書く
過去言わず尼僧小指をかくしきる
謎深い女着こなす江戸小紋
思い出の母あかぎれの指だった
秋深し一人ぼっちの滝になる
この指が生きてゆくすべてマッサージ
霧深い港ロマンの無い寒さ
縄飛びへ秋を見つけた子供達
知っている顔にむっくり犬は起き
合掌の十指菩薩になって来る
政界なみに事務所にもある派閥

比呂志 客遊子 笛永珠 明代友 和石友 誠史友 王飛鳥 拓美芽 白深子 潮花子 紫香花 水香花 杜的報 川上大輪報 とよ子 寅蔵 十幸郎

今一度鏡に合わせ赤を着る
赤誠という字も今は忘れられ
原点にかえれと夕陽赤く炎え
真赤な目が父ちゃん悪いと責めている
人生それぞれ私は今のままが好き
それぞれ暮しを干して梅雨晴間
言いたい事それぞれ言えば角が立つ
それぞれ欠点補う母がいる
いずれかに甘味あるらし蟻の列
文学は甘い資源を探しうる
甘い嘘幸せ抱いた瞳がうるむ
人生を甘く見過ぎた貧乏です
甘言にまんまと女のせられる
甘い甘い誘惑がある夏の浜

南大阪川柳会

中川滋雀報

柳宏子 柳彦 鎮彦 柳信 小松園 千松園 好一郎 君郎 道夫 道雀 滋雀 岳生 弘生 儀度 好文 好秋 凡九郎

低姿勢の中にも迫力秘めている
迫力のある音楽で炎えている
老夫なお家長の迫力持ち続け
急所つかれてハンカチ持ち替える
石庭の急所と思う石一つ
急所だけ教えて行った広い肩
悩んでるところが若い者はずれている
悩みの捨て場に神の灯がある
悩みもつ凡夫は神に弱くいる
太陽の悩みが落ちてる水たまり
唯一つの悩みは娘がまだ嫁かず
ピンクの毛糸女ロマンを編んでいる
恋をする手芸マフラー長くなる
姫の織る淨き心の曼陀羅図
おつまみの山にお酒が少なすぎ
おつまみはこうこの尻尾だけで足り
目先が効かぬから危ない賭もせず
おつまみは追う足許に穴がある
おつまみに此処のおやじの顔がある

玉子 福水 輝寿 よしほ 富水 雀子 与呂志 与呂志 祥月 大輪 柳宏子 柳彦 鎮彦 柳信 小松園 千松園 好一郎 君郎 道夫 道雀 滋雀 岳生 弘生 儀度 好文 好秋 凡九郎

川柳たけはら
ちっばけな秘密を抱いてまだひとり
泣き笑い子がいて残り火燃してくれ
杓で呑む水が美味しい山の里
神仏は見捨て給わずいい知らせ
地下足袋の夢だんだんと小さくなり
真白い陶磁器と化すもの想い
ナイターの九回裏は風呂で聞く
夜の川言葉はいらぬ二人づれ
ビール酌ぎ合って共稼が楽し
フェリーのは波はきれいなまっ白い
負けられはせんボウフラムも生きている
思う事ズバツと言えて羨まし
幸福になろうネみみずの蘭つづく
盆橙籠いまだ二十のままの妻
赤飯がおはここまめな妻のいて
炎天下蟻黙々と冬仕度
雨の日もいわね雨の日のデイト
参観日ははらはらさせて子が答え
他人の手を借りねば脱げぬ仮面です
妻の小言に妻の疲れを見つけたり
奥の院火は火の彩に夏祭り
川柳わかやま
津田与史報
嘘ついた女がきれいに手を洗う
封筒の中で燃えてたラブレター
体育も犬に引かれて汗である
残された一手にチャンス賭けてみる
燃えてきた手紙決意が揺れそう
燃えてきた手紙決意が揺れそう
燃えている暖炉が聞いている別れ
ベッコ抱く女素通り慈善鍋
燃えるほど恋してみたらうまい嘘
振り上げた手子の瞳に負けている
寂しさをベッコにまぎらす不倅せ
ベッコの恋伝える風に嘘はない

森井善居報

鬼水焼 静水焼 凡子水 文子水 寛子水 蘭子水 笑子水 愛子水 白狐 紫光 花炎 貞千代 美千代 かつ子 一史 篤史 雀踊子 裕美 太茂 和子 道夫 福水 道夫 喜司 天智 那智 善彦 三彦

体育の先生ここで汗を拭く
夕食をベットと分け合う妻の留守
可愛い手くれが分身かと思
母の声だけが聞えゴールイン
不甲斐ない猫でリボンを飾られる
良心が動いてくれる手が頼り
夕焼の鍵つ小犬と話し合い
九官鳥自分の声で鳴きたがる

どんぐり川柳会

谷垣史好報

傾いた柱に系図がのしかかる
傾いた家計も知らずピアノ鳴る
院長の受身患者は嘘を笑う
小遣いを貰うてからの笑顔です
七転び受身で達磨起きてくる
ラッシュアワー受身のままで駅に着く
夕顔へそろそろ風呂が湧きますよ
ゴキブリへそろそろ迫る殺意あり
旧交の徳利はもどかしく傾ける
傾いた菊が待ってる旅帰り
すすき野にそろそろ風もトゲを持つ
長男へ母は受身を教えない
中盤戦で攻勢に出た受身
もう二度と逢うまい傘を傾けて
現金の万能情け薄くいう
現金に未練は通していう咳阿
受身でも芯は通して母健在
傾いた企業へ大手の手がのびる
旧街道の少し傾いているポスト

川柳さやま

河原みの報

恒治 京子 幸功 幸子 英代 光代 美幸 弥生 小松園 酔々 ゆきま 薫風 鬼遊 恵美子 サヨ 鎮彦 岳人 好太郎 喜風 儀砂 万里 史好 百合子 緑村 白峯 近江 無鬼

大物の錯覚神を偽証する
毛筆でもらいお返事出しそびれ
朝の客おくれ毛までつつ出迎える
一本の毛から動かぬホシと決め
人生の終末消印を押され
寡婦ひとり生き抜く為の偽りか
正直に言えば損する為を伏せ
偽りを知らぬ童児の瞳がきれい

川柳後楽(岡山市)

井上柳五郎報

花道を芸の歩幅で長く見せ
惜道のない主婦業に萎びゆく
花道を追われるように暮がおり
大見栄をきった花道過去の夢
速捕者へ悲しいもよカメラの目
部下一人犠牲速捕から逃れ
一文無しで詐欺師の種を播き散れ
ロッキード速捕の種を播き散れ
お姿を拝み明治の母は泣く
傷心の姿は後を振り向かず
姿見がほこりをかぶる不精者
ヨイヨイと好みの姿で阿波踊り
茶話へ政治不信の声とがり
茶話へ政治不信の主婦が寄り

川柳東大阪

竹中肖二報

正直な男に座る椅子がない
定退の椅子にもほろりししづく
密約が社長椅子を棒にふり
やつと廻り椅子すぐ定年の辞令
バイブルを片手に慾は消えない
バイブルの視野に良心ちこまる
ゆるし合う心をバイブルから貰う
バリバリの社長で部下を疑わぬ

宗住 可代子 千代子 素水 村雨 珠玉 笑陣 笑女 定平 佐加恵 博彦 夏嘉 恒山 雷山 久米雄 ひろし 柳五郎 秋風 胡風 誓一 儀一 文四 文四 雅風 文秋 美彦 鎮彦

バリバリとこうこ噛みます入歯です
バリバリとやてくれるが縁遠し
あれも芸なのかと采れるのが人気
値札に采れ平然と買うのにまた采れ
明治の眼ただ采れるフアッション
近頃のニュース采れることばかり
日帰りの旅とは見えぬ峠道
日帰りの旅とは見えぬ峠道
荒海に慈母灯台のあかり見え
海鳴りに青いバナナが熟れている
何もかも沈めて海は海の貌
アイディアがごろ専売特許局
整理整頓人がする
予約席送って母の日棄しませ
辻易者細々我が身占えず
占いに外れて幸せ呼んだ運
離婚して女流評論家で再起

佳句地10選(前月号から)

高杉鬼遊選

妻だけにどんな謎でも解けてくる
捨石がもがけばもがく程埋まり
おでこを叩くと失敗の音がする
逃げ足の遅かったのが後始末
雑魚一匹広い海から釣り上げた
黒い車はスピード違反などしない
新米の味は雀が試食どし
オンザロック氷のできる間が待てず
二代目の墮落をしかる鬼かわら
昂ぶりを静める帯を低くして

弥生 哲郎 儀一 史路 道葉 亜也子 みのる 君子

綾明女 恒風 喜九郎 凡度 柳近 右二 肖二 美子 酔々 志津 天草 喜醉 天草 徳仙 秀峰 酒仙

何不足ないから浮気しようなり
 嫁の不足がけで袖う親心
 町方は野菜不足で青い顔
 コスモスにゆれる小径を恋が行く
 ひと言がよう効いたのか慌て出し
 拗ねている胸にゆれてるペンダント
 駒つなぎ會(大阪市) 岸南柳報
 人並に暮らして貯金出来ぬ愚痴
 人並に悔なく生きて喜寿になり
 人並が頭すらべて智慧がない
 人並にしてもはげしい貧富の差
 人並でないしあわせを説く尼僧
 酔うてまたズボン脱がせば小銭散る
 掌のピタ銭この酒屋に借りがある
 バラ銭がなくかしわ手だけにする
 切れ目なく上手にむけた梨の皮
 小使いの切れ目へかいた妻の紐
 切れ目ない電話テープの聲廻る
 子を思ふ切れ目切れ目のつけ屈け
 震度七山の切れ目が家を呑み
 人使い客の切れ目に出すおやつ
 客足の切れ目に一寸立話し
 叱られて笑って見せる切れ目でず
 銀行の切れ目が怖い資金ぐり
 あかきれの切れ目がうずく手内職
 蟬の声切れ目があった別れきわ
 流れ作業心に切れ目のない疲れ
 タクシーを飛ばしてやつと接ぐ切れ目小松園
 三井が丘川柳會 高田博泉報
 灰皿は朝のまんまで置いてあり
 ふんきりを真になねこみ立ち上る
 灰皿の煙草を拾って吸った過去
 意見対立灰皿煙ってる
 手あたり次第灰皿にして独り住む

柳影舟 東雲 磨天郎 天笑園 小松園 南柳報 祥惠柳 肖園 規不風 宏水 石捨 誓彦 鎮明 儀正 喜正 茂信 善信 小とむ 綾女路 美代女 雅風 小松園 博泉 貞彦 隆子 あいき

灰皿に時間たまってゆく焦り
 精神薄弱児の母に運動会はない
 運動会こっそり見てる車椅子
 角栄にそれでも下駄を穿かす気か
 本を読む手は灰皿を捜しこみ
 灰皿を忘れる程に話しこみ
 浴衣には素足で花緒があざやかに
 灰皿はみかんの皮でよく喋べり
 すいがらで今日のお客をあててみせ
 運動会茶呑み友達を観に来て
 父親の出番もあった運動会
 運動会教育ママは無口なる
 灰皿に気丈な女の朱が燃え
 かけつて大きな女のお腹揺れ
 運動会園児気儘に走りだす
 どこ借りてしまひよかと言う運動会
 ボリニューム一杯過疎ふつとばす運動会
 西宮北口句會 小浜牧人報
 猫撫で声男ほろりと騙される
 高官の椅子灰色の匂いする
 忌にこもり声なき声聞く仏間
 ネットレスの玉ばかりと散り出足止め
 大声で叱り叱びし椅子二つ
 穴を覗けば道化師が死んでいた
 たつた今別れた声が聞きたくて
 喜びの声玄関を飛び上り
 男盛り野心を含む廻り椅子
 敬老日明るく過ぐせ鳩の声
 亡き母の足音に似て雨が降る
 お早うさんから今日一日が決まる声
 エリロンを狂わす椅子が空いている
 天皇の孤獨を椅子が知っている
 耐えている視界へ青い空がある
 虹川柳俱樂部(唐津市) 新岡回天子報
 亜成 亜鈍 三千子 野しひろ 三郎 野生 三郎 亜也子 加小路 小代子 惠美子 一念度 琴音 てまり 公子 凡九郎 古方 千世子 清川 泉山 泉女 笑女 伊升 紅扇 無聖 喜世 喜浦 総糸 裕ケ 牧人 婦美子

姿見に自信たつふり腰をふり
 日の丸に裏表なし菊佳節
 実家から返す気のない金を借り
 懸崖の菊を並べて駐在所
 水借りたことを和利子は返される
 金借りしに行って夫が酔うて来る
 忙がしい時だけ苦勞忘れる
 キリストを信じていても腹が減る
 忙わしいは笑って外す手
 乗り替る列車忙忙しん発車ベル
 アサリ貝ボリの中とは知らぬ所作
 幾山川と言ひし旅なり法王庁
 ゆうちあ川柳會 輕谷漫柳報
 盆休み先祖と孫で疲れ果て
 リリフの妻へ押し売り捨てぜりふ
 留守番は手酌の味を知るチャンス
 酒好きの苦作にしがわが一つふえ
 酒好きの亡母へ一杯つぐお盆
 倉吉打吹川柳會 奥谷弘朗報
 時間です逢瀬を鉄の門がとず
 使う身と使われる身の一時間
 日照のつえの仕切時間に無表情
 日頃の時間差のつく米の出来
 秒針に青春さきむ腹時計
 初デート時間来るのが待ち遠し
 五時間も待って愈く診て貰い
 待たされて待たせては時間無駄となり
 目に見えぬ時間に人はしばられる
 文明はタイムマシンに支配され
 時間切れ厳守と書き添える
 案内状時刻読み了らざるに駒を投げ
 名人が身を削られる持ち時間
 盛衰を笑って時間厳然と
 時間みて出たのにパスは先に発ち
 五神水 照沖 廣実 岩光 愛郷 畑原 桑原 一勝 紫浪 虹汀 回天子 漫柳 萬住 万一 みる 盆の 秋女 石菜 御路 御夕 牛歩 小生 布堂 律子 勇峰 満春 和栄 碧穂 伊之蔵 寿雄

・ 募 集 ・

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

二月号発表 (12月15日締切)
川柳塔 (10句) 若本多久志 選
水煙抄 (10句) 川村好郎 選
愛染帖 (3句) 正本水客 選
課題吟 (各題5句以内)

「消防車」 河井庸佑 選
「花嫁」 原田一風 選
「豆まき」 遠山可住 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かづかいにしてください。

三月号発表 (1月15日締切)
川柳塔 (10句) 若本多久志 選
水煙抄 (10句) 川村好郎 選
愛染帖 (3句) 正本水客 選
課題吟 (各題5句以内)

「婦人」 野坂つき子 選
「緑」 八木千代 選
「彼岸」 小野克枝 選

一人の遅稿 大ぜい困る

定価 三百五十円 (送料29円)
半年分 二千二百五十円 (送料共)
一年分 四千二百円 (送料共)
昭和五十一年十一月二十五日印刷
昭和五十一年十二月一日発行

大阪市南区鰻谷中之町二〇番地
編集兼 島 蓬 太 郎
発行人 中 島 蓬 太 郎
印刷所 藤 原 童 心 社
郵便番号 542
大阪市南区鰻谷中之町二〇番地
発行所 川 柳 塔 社
電話大阪・二七一一三九八五番
振替口座大阪・三三三六八番

本 社 忘 年 句 会

日時 十二月七日 (火) 午後六時
会場 金 属 会 館
南 区 鰻 谷 東 之 町 10 番 地
電話 271・3935 番
柳 話 菊 沢 小 松 園
(今月の出題・見島与呂志)
兼 題 「応援」 竹 中 肖 二 選
「臨時」 高 杉 鬼 遊 選
「古い」 戸 田 古 方 選
「古木」 若 本 多 久 志 選
会 席 題 二 題 当 日 發 表
費 三 百 円
★投句だけの方は切手百円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷中之町20

川 柳 塔 社

1月の兼題 「海蛇」 「二十歳煮」
「雑」

何を選んでいただくかは先様におねがいして
タカシマヤの商品券をお贈りするのにも心に
くい贈物かと存じます

一〇〇円から
一〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です



ば 橋 条
な 本 日
ん 四
大 東 京 京 都

高島屋

・ペンペン草・

12冊目

★こんな仕事をしていてアッという間に一年が経ってしまふ。明けても暮れても、原稿 編集・校正・発送のくり返しである。

★あわたたしい人生だなとおもうこともあるが、合本の数のふえていくのを見ていると、「コレがオレの人生なんだな」とあきらめてしまふ。映画誌・文芸誌

アリナミン[®]A

お役だていただくために タケダ

肉体疲労時・妊娠授乳期・病中病後のビタミンB₁補給、神経痛・筋肉痛・腰痛・肩こりの緩和
 ①日、1-4錠を1-3回に分けて服用してください。②説明書をよく読んで正しくお使いください。③25ミリ錠のほかに5ミリ錠

武田薬品工業株式会社 〒541 大阪府東区通勝町12-27

「川柳誌と漫才誌」人生の大半をノリとハサミと赤エシビツで過ごしてきた。数年前、岡田甫先生が「なぜ出版社へはいらなかったの? やっぱり金儲けがヘタなんだね」となぐさめてくださった。

原稿依頼

★本を早く出そうとする月は、原稿を急がさねばならない。書くのが商売でもない方にヤイヤイ攻める、そんな時は心苦しい。

葉子コーナー・

▼今年はお友達に恵まれてまして、裸で付き合える方も出来、私にとっては嬉しいう年でした。

▼心身共に未熟な私ですが幼少の頃より、今日まで周囲の温かい方々のお陰で生きてこれたように思います。

▼一年をふり返って、そのことをしみ染みと感じております。来年もどうぞよろしくお導き下さいませ。

原稿依頼があった。どえらいというのは、その豪華な執筆陣の顔ぶれで、いずれを見ても柳界を背負う大家ばかりだった。そんな中にボクが一枚はさまっていたのである。これはボクを男にしてやろうと推薦してくださった方がいたわけで、胸がいたいほどうれしかったが、それをお受けしてはまず大家諸氏に対し非礼であると思った。そこでおことわりしたことがあった。ボクの場合、立ち場が違うのでそうせざるを得なかったのである。

★十数年前、今東光先生主宰の月刊誌に随筆を書いたことがあった。その執筆者のなかに岡部伊都子氏もはいつていたが、これは柳誌ではなかったの、別に気にしなかった。須崎立秋氏のことを書いたのである。その後、ある雑誌社の「大正デモクラシー」と上方芸能の特集に、大正時代の川柳界を書けといわれ「壮絶水府(番傘)VS路郎(川雑)」を書いた。他誌へ川

たのしさひろがる お買物



阪急

大阪梅田本店
 千里阪急
 神戸三宮支店
 東京大井町店
 京都府城陽支店
 京都京橋支店
 ロスアンゼルス阪急

柳のこと書いたのは、あとにもさきにもこの二篇だけである。しかし、これとでも、柳誌からの依頼だったら、他のしかるべき人に代わってもらったかも知れない。

歳末風景

★新年号を送り出して、ホッとした気分を雑踏する歳末の街へ持って行く。二月号の編集に元日から初出の日まで仕事があるので、歳末の数日間がはく休日になる。ゆったりした気分で大様がバタバタしているの

を見るのも楽しいものである。ポータスをつかってやろうと、血眼でショッピングを楽しむ奥様もほほえましいし、マイカーで走りまわっている商家らしい姿を信号の赤の下でボンヤリ見ているのも楽しい。とにかく稼ぐ男の眼や買入物あかりの女の眼がらんらんと光っていて街が活気ないぞという、そんな大都會がやっぱり好きである。

★よいお年を、どうぞ。
 (不二田一三夫)

昭和四十二年一月二十九日
 昭和五十一年十二月二十五日
 創刊大正十三年通巻五九五号
 第三種郵便物認可
 印刷 発行(毎月一日発行)

川柳塔

十二月号

定価 三百五十円(送料二十九円)



思いたったらデリカタイム

お求めやすい価格で6種類

●価格は手軽 ●サイズは気軽 ●500ml/200ml 各赤・白・ロゼの合計6タイプと種類は豊富 ●栓はコルクスクリュウのいない、イージーオープンキャップ ●しゃれたデキャンタータイプ ●中味は人気のベストセラーワイン(デリカ) …と、いいことづくめ。

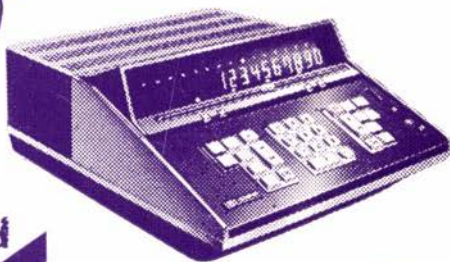
なんと/500ml 赤・白・ロゼ 450円。
 あらっ/200ml 赤・白・ロゼ 200円。

山サントリーワイン
デリカタイム

製造・販売 サントリー株式会社



タッチでえらべば
 やっぱりサコム



サンヨー電子式計算機

サコム
 SACOM

見やすい設計 ICC-162型 280,000円
 平面表示ゼロサブレス・√%キー付き
 16ケタ2メモリー高級品

SANYO 三洋電機株式会社